

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第25集

渕ノ上古墳

FUCHINOE KOFUN

— 発掘調査報告書 —

1993

館林市教育委員会

渕ノ上古墳

FUCHINOE KOFUN

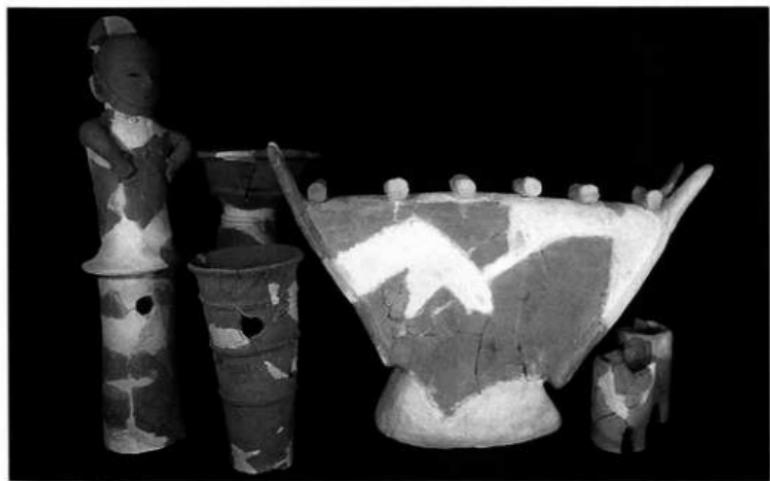
— 発掘調査報告書 —

1993

館林市教育委員会



測ノ上古墳石室内直刀等出土状態



測ノ上古墳出土埴輪

序

現在、館林市内には市指定史跡の山王山古墳をはじめとして25ヶ所の古墳が確認されています。

渕ノ上古墳は昭和59年から実施した館林市埋蔵文化財分布調査の際に新しく発見され、このたび地区公園整備に伴って発掘調査を実施いたしました。

館林市内における古墳の発掘調査はこれまで数例を数えるのみでしたが、今回の渕ノ上古墳の調査によって市内ではじめて横穴式石室を調査することができたばかりか、直刀や埴輪などこれまでにない多くの出土遺物が発見され、利根川中流域に分布する古墳の特徴を備え合わせた古墳であることがわかり、6世紀後半の館林の古代史が少しずつ明らかにされはじめました。

今回の発掘調査によって、多くの出土遺物を後世に保存し、古墳の姿を記録することができたのは大きな成果といえます。さらに、調査終了後、古墳の石室の一部を地区公園のなかに保存することができ、地域の人々によって地域の文化財が大切に受け継がれているのも大変喜ばしい限りです。

渕ノ上古墳の調査からはや5年の歳月が経過しましたが、その間できる限りの出土遺物の整理や保存処理を行い、ここに調査報告書を刊行することができました。調査ならびに報告書刊行にあたりご指導・ご協力いただきました各方面の皆様に心から感謝申しあげるとともに、本報告書が広く活用され、館林の歴史の解明と地域文化の再発見に役立てられることを願って序といたします。

平成6年3月

館林市教育委員会

教育長 高瀬 利一

例　　言

1. 本書は地区公園建設に伴い事前調査された、館林市羽附旭町測ノ上に位置する測ノ上古墳の本調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和63年4月から5月まで1次調査（範囲確認調査）を実施し、同年9月から11月まで2次調査（本調査）を実施した。
3. 発掘調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、次の組織で行った。

担当主管　館林市教育委員会文化振興課文化財係
担当職員　三田正信（当時文化財係長）、岡屋英治（文化財係学芸員）
　　　　　　黒澤文隆（当時文化財係主事・調査担当者）、岡屋紀子（文化財係学芸員）
　　　　　　藤坂和延（当時文化財係嘱託・調査担当者）
4. 1次調査（範囲確認調査）は国・県の補助を得て実施し、「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集　館林市内遺跡発掘調査報告書」で調査報告を行った。
5. 2次調査（本調査）に伴う諸経費は館林市が負担した。
6. 本書の作成・編集は岡屋紀子が担当し、執筆は黒澤文隆（I・II・III・V）、岡屋紀子（IV・付記）が行った。
7. 本書の作成に伴う遺物整理、遺物図化、図版作成は次の者があたった。

根岸良子　長棟紀子　戸叶真千子　奥山裕り　荻野貴子　野口文恵　石川有紀
中條里香　砂賀香織　橋本治美　持田恵理　布目雄一郎
8. 現地調査の参加者は次の通りである。

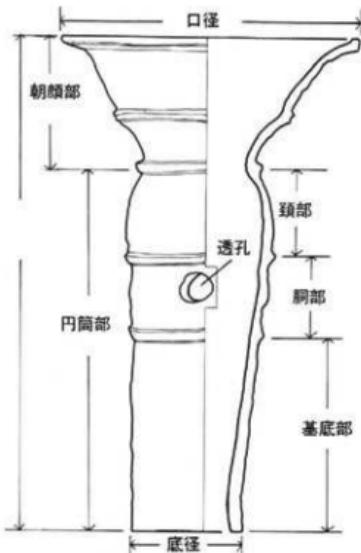
石川栄吉　早野茂　寺内義正　近藤久美子　八木島市　杉山信作　葭葉嘉亮　梁瀬高藏
石橋矢三　越谷長男　菅沼徳次　川島清　藤坂江里　太田鉄雄　坂田彦次　内山加代子
林正行　吉沢春男　中井貞次　根岸良子
9. 出土遺物ならびに写真・図面等記録資料は館林市教育委員会にて管理・保管してある。
10. 出土遺物の金属器のうち直刀の保存処理は（株）東芸に依頼し、その他の金属器は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の指導のもとに行なった。
11. 発掘調査の実施にあたっては地区住民の方々に多大なるご協力をいただき、厚くお礼申しあげます。
12. 発掘調査ならびに本書の作成にあたり次の方々にご指導・ご協力をいただきました。ここに明記して深く感謝申しあげます。

群馬県教育委員会文化財保護課　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
青木茂　青木庄二　青木茂三郎　大杉庄市　清水昇　小暮一男　宮田裕紀校　前沢正之

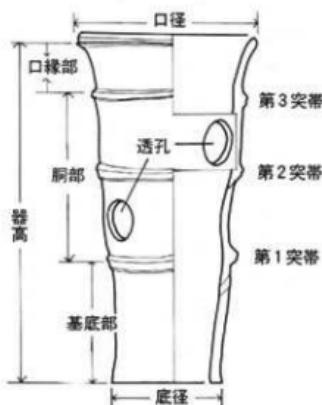
凡 例

1. 本書中における当遺跡の造構および遺物番号は、現地作業に際して用いたものを改訂して新しい番号を付した。
2. 図版の縮尺はそれぞれに表示した。
3. 遺物の各部名称は次のとおりである。

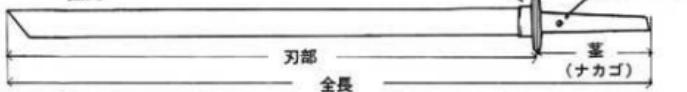
朝顔形円筒埴輪



円 筒 塩 輪



直刀



測ノ上古墳調査報告書目次

□ 統

序

例言・凡例

I. 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の方法と経過	2
II. 測ノ上古墳の地理的・歴史的環境	4
1. 館林市内の古墳	4
2. 測ノ上古墳と周辺の古墳	4
III. 検出された遺構	7
1. 墳丘と外部施設	7
2. 主体部（埋葬施設）	11
3. 前庭部	13
4. その他	15
IV. 出土遺物	17
1. 金属製品	17
2. 墳輪	23
(1) 形象埴輪 (2) 円筒埴輪 (3) 朝顔形円筒埴輪	
3. その他の遺物	45
V. 調査のまとめ	46
1. 測ノ上古墳の年代について	46
2. 測ノ上古墳と利根川中流域の古墳	46
3. 測ノ上古墳の整備	50
〈付記〉館林市指定史跡「山王山古墳」について	51

図 版 目 次

第1図 潟ノ上古墳位置図.....	2
第2図 館林市内の古墳分布図	5
第3図 潟ノ上古墳周辺の古墳分布図.....	6
第4図 調査区全体図.....	8
第5図 墳丘土層断面図.....	10
第6図 主体部実測図.....	12
第7・8図 前部出土状態図(1)(2).....	13
第9・10図 5号トレンチ内埴輪出土状態図(1)(2).....	15
第11~14図 出土遺物(1)~(4) 金属製品.....	19
第15~22図 " (5)~(12) 形象埴輪.....	26
第23~26図 " (13)~(16) 円筒埴輪.....	38
第27・28図 " (17)(18) 朝顔形円筒埴輪.....	43
第29図 " (19) 提瓶・石製模造品.....	45
第30図 利根川中流域の古墳分布	48
第31図 潟ノ上古墳保存整備工事断面図.....	50
第32図 山王山古墳位置図.....	51
第33図 山王山古墳墳丘平面図.....	52

写 真 目 次

口絵 潟ノ上古墳石室内直刀等出土状態	12・13. 調査全景.....	57
口絵 潟ノ上古墳出土埴輪	14~18. 主体部.....	58
1. 潟ノ上古墳全景(調査前).....	19~20. 土層断面.....	60
2. 墳丘調査.....	21. 5号トレンチ出土状態.....	61
3. 主体部出土状態.....	22~23. 前部埴輪列出土状態.....	61
4. 前部出土状態.....	24~25. 調査風景.....	62
5. 5号トレンチ内埴輪出土状態.....	26. 遺物整理風景.....	62
6. 潟ノ上古墳出土角閃石安山岩.....	27~35. 出土遺物(金属製品).....	63
7. 筑波山古墳石室.....	36~58. 出土遺物(形象埴輪).....	65
8. 筑波山古墳.....	59~77. 出土遺物(円筒埴輪).....	69
9. 整備後の澘ノ上古墳.....	78~85. 出土遺物(朝顔形円筒埴輪).....	72
10. 山王山古墳調査風景.....	86. 出土遺物(提瓶).....	74
11. 山王山古墳全景.....	87. 出土遺物(石製模造品).....	74

I 調査の概要

1. 調査に至る経緯

館林市は群馬県の南東部に位置する。地形的には関東平野の北西部にあたり、関東ローム層をのせる低い台地（邑楽・館林台地）と、利根川や渡良瀬川によって形成された低地に大別される。台地を浸食する部分には大小の池沼が存在し、特色ある景観を呈している。

遺跡が残るのは台地上が中心で、『館林市の遺跡』（1988年刊）によると市域に144の遺跡が登載されている。

測ノ上古墳は、『上毛古墳総覧』（1938年刊）や『群馬県遺跡台帳』（1973年刊）に未登載の遺跡で、『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査によって発見された。市の南東部、東北縦貫自動車道路館林ICの南東約800mに位置し、遺跡分布調査時の現況は稻荷神社境内地となっていた。埴輪片の散布が確認されたため、市内羽附旭町字測ノ上95番および96-乙番を中心に古墳であることが推定され、小字名を付して「測ノ上古墳」と命名された。

昭和63年2月、神社境内地を削平し公園を建設する計画が持ち上がり、地元関係者と館林市教育委員会との間で協議が行われ、事前に発掘調査を行うこととした。



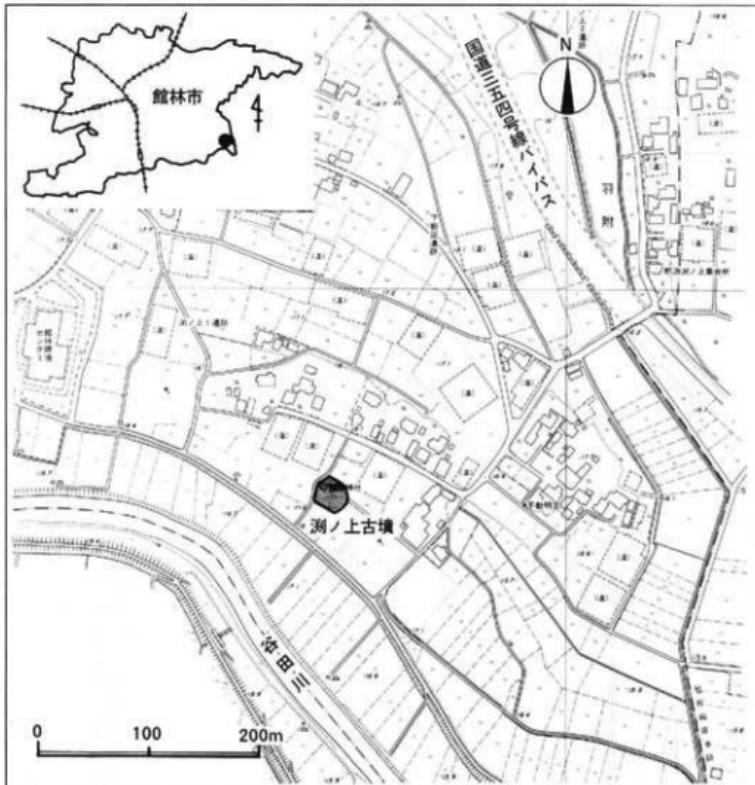
写真1　測ノ上古墳全景（調査前）

2. 発掘調査の方法と経過

測ノ上古墳の発掘調査は、社の解体（昭和63年9月）を挟み、2回に分けて行った。期間は1次調査（範囲確認調査）が4月～5月、2次調査（本調査）が9月～11月である。

〈1次調査〉

古墳の真偽や形態・規模を明らかにすることを目的とする範囲確認調査で、墳丘のある字測ノ上95番地から開発区域外の3方向（東・南・西）にトレントを設定し、トレント名を東から左回りに1号・2号・3号とした。地籍図には測ノ上95番地の東に方形の土地（96-乙番地）が



第1図　測ノ上古墳位置図（現況図）

あり、現地調査では隣接する農地との境に掘り込みが見られた。地元の古老からの聞き取り調査では、竹の根が農地へ拡がることを防ぐためのものという話であるが、周辺の古墳の形態などから前方後円墳となる可能性が想定されたため、96-乙番地から南へもトレンチ（4号）を設定した。

調査の結果、1号と3号トレンチから対応する溝の断面が検出され、周濠と判断された。4号トレンチからは対応する溝は確認されず、地籍図のような墳形ではないことが判明した。現存する掘り込みも、断面から聞き取り調査のような性格のものと判断された。2号トレンチは墳丘の南西部が耕作などにより大きく削られている状況がうかがえ、周濠は破壊されていた。

『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集 館林市内遺跡発掘調査報告書』（1988年刊）に報告済

〈2次調査〉

墳丘部の調査では、社の解体後、墳頂から3方向に幅1mのトレンチ（5号）を設定し、断面から墳丘構造の把握を試みた。

埋葬施設は、墳丘の南斜面から検出された。5号トレンチから石室を包む粘土の一部が確認できたためトレンチを拡張精査してその全容が明らかになった。形態は南に開口する横穴式石室で、大規模な盃形により4段目より上の側壁の石は完全に抜き取られた状態であったが、本市における初の横穴式石室検出例となった。石室からは副葬品である直刀などの鉄製品類が出土した。

また、石室の前面には前庭部が広がり、拡張調査において墳丘裾部から埴輪列の一部が検出された。その後墳丘全体にわたって調査を行ったが、古墳築造時の埴輪列がそのまま検出されたのは南斜面のみである。なお、葺石は確認されなかった。

他に、墳頂部付近のトレンチ内より埴輪片が大量に出土したため、トレンチの拡張精査を行った。

墳丘の現況平面図は平板実測により1/50で作成し、等高線は25cm間隔とした。

なお、石室の精査終了後の10月29日に現地見学会を実施した。

〈整理作業・遺物保存処理〉

発掘調査終了後、直ちに遺物洗浄、接合等の整理作業に入った。

報告書作成に伴う整理作業は、平成6年1月から3月まで遺物接合・石膏入れ・遺物実測・トレース・拓本等を行った。

また、出土した鉄製品のうち直刀2口の保存処理・X線撮影を調査後行った。

II. 渕ノ上古墳の地理的・歴史的環境

1. 館林市内の古墳

『館林市の遺跡』(1988年刊)には、古墳時代の遺跡（複合遺跡を含む）として、包蔵地93古墳17（延25基）が登載されている。この中で発掘調査により住居址が検出されたものに、赤生田道満遺跡（弥生時代から古墳時代への移行期）、八方遺跡、伝右エ門遺跡、尾曳町遺跡、高根・外和田遺跡、北近藤第一地点遺跡、南近藤遺跡などがある。古墳17の内訳は、山王山古墳、愛宕神社古墳、富士嶽神社古墳、富士山古墳、町谷古墳、同2号墳、下志柄古墳、渕ノ上古墳、高根古墳群（5基）、日向古墳群（5基）、推定地7である。

昭和10年調査の『上毛古墳総覧』(1938年刊)には、市域に67基の古墳が存在していたことが記録されている。うち、59基は館林市北西部の旧多々良村（現多々良地区）に集中する。多々良地区北には渡良瀬川の支流矢場川が東流し、流域には中日向古墳群（栃木県足利市）や松本古墳群（邑楽町）など多くの古墳が分布している。

館林市内で墳丘の発掘調査が行われたのは、市内高根町源清寺に存在した天神二子山古墳である。この古墳は『館林市誌』の編纂に伴い、昭和37年に群馬大学が発掘調査を行い、埋葬施設の一部が検出されている。これは白色粘土を使用した竪穴式の粘土椁と推定されるが、実態は不明である。その他、昭和59年度には山王山古墳の整備に伴い、市教育委員会で周濠の調査を実施した。

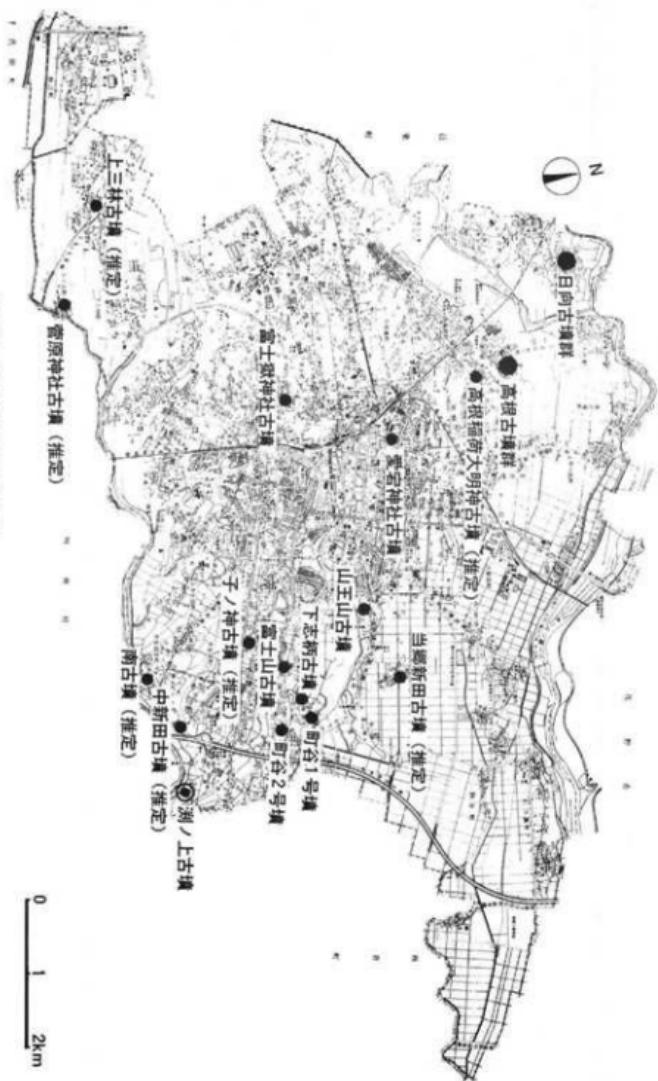
2. 渕ノ上古墳と周辺の古墳

渕ノ上古墳の所在地は現在の市町村境に近く、板倉町境からは約200mの距離にある。また南方約100mは谷田川で明和村境となっている。

谷田川は邑楽郡西部に源を発し、邑楽・館林台地の南を利根川とほぼ並行に東流する長さ約20kmの河川で、台地上に降った雨の排水先となっている。渕ノ上古墳の所在地は、谷田川の流末渡良瀬川遊水池から約8kmの距離にある。

谷田川流域、特に邑楽郡東部には『上毛古墳総覧』他の遺跡分布調査により、多くの古墳が存在したことが確認できる。

渕ノ上古墳同様、谷田川左岸の台地上に立地するのは、板倉町岩田の舟山古墳（1）・筑波山古墳（2）・天神下古墳（3）・道明山古墳（4）である。天神下を除く3つの古墳の形は前方後円墳と推定され、最大の筑波山古墳は全長約53.5mを測る。この他館林市域では赤生田町・入ケ谷町・上三林町に古墳の推定地が分布している。



第2図 猿林市内の古墳分布図

谷田川右岸の微高地上に立地するのは、板倉町飯野の松ノ木古墳（5）・中古墳（6）、同町大高島の稲荷神社古墳（7）・大塚山古墳（8）、明和村斗合田の稲荷塚古墳（9）・愛宕様古墳（10）・薬王寺古墳（11）・富士嶽古墳（12）、同村江黒の江黒古墳（13）である。また、谷田川上流では千代田町赤岩周辺にも古墳の分布が見られる。

谷田川右岸の微高地上には集落が列を作って発達している。この微高地は国土地理院発行の「1/25000 土地条件図」には自然堤防と表現されている。しかしながら、関東平野における発掘調査で低地中に埋没しているローム台地の報告例もあることから、谷田川と利根川に挟まれた低地中にもローム台地が埋没していることが考えられる。

谷田川流域には、古墳以外にも数多くの土盛りが見られるが、これはミツカ（水塚）と呼ばれる洪水対策用の建物を建てたためのもので、この地方の特色である。

測ノ上古墳の周辺で石室の存在が確認されているのは筑波山古墳と稲荷塚古墳で、使用されていた石は角閃石安山岩である。その他の古墳でもこの石の散布が見られるものがある。角閃石安山岩は6世紀中頃、榛名山の爆発により噴出した軽石で、これを石室に使用する古墳は利根川流域に数多く分布する。

測ノ上古墳周辺の古墳群の築造時期については、使用された石材より、古墳時代後期から終末期（6世紀後半～7世紀初頭）のものと推定される。調査前、測ノ上古墳もその立地条件から、これらの古墳群に属することが予想できた。



第3図 測ノ上古墳周辺の古墳分布図

III. 検出された遺構

1. 墳丘と外部施設

墳丘は、調査前は神社境内地として土地利用されており、墳頂部は平坦な状況となっていた。墳形は地籍図のような形に削られており、特に南西斜面の裾部は完全に破壊されていた。

古墳は低い台地に立地し、関東ローム層の地山を基盤として墳丘を積み上げている。墳丘部に設定したトレンチの土層断面を観察すると、盛土はローム粒子とカーボン粒子を含んだ黄褐色土と暗褐色土を使用し、交互に積み上げた状況がうかがえ、地山から約1.3mの土盛が残存する。しかし、墳丘中央付近には擾乱土層が広範囲に見られ墳丘の破壊が著しいことがうかがえる。

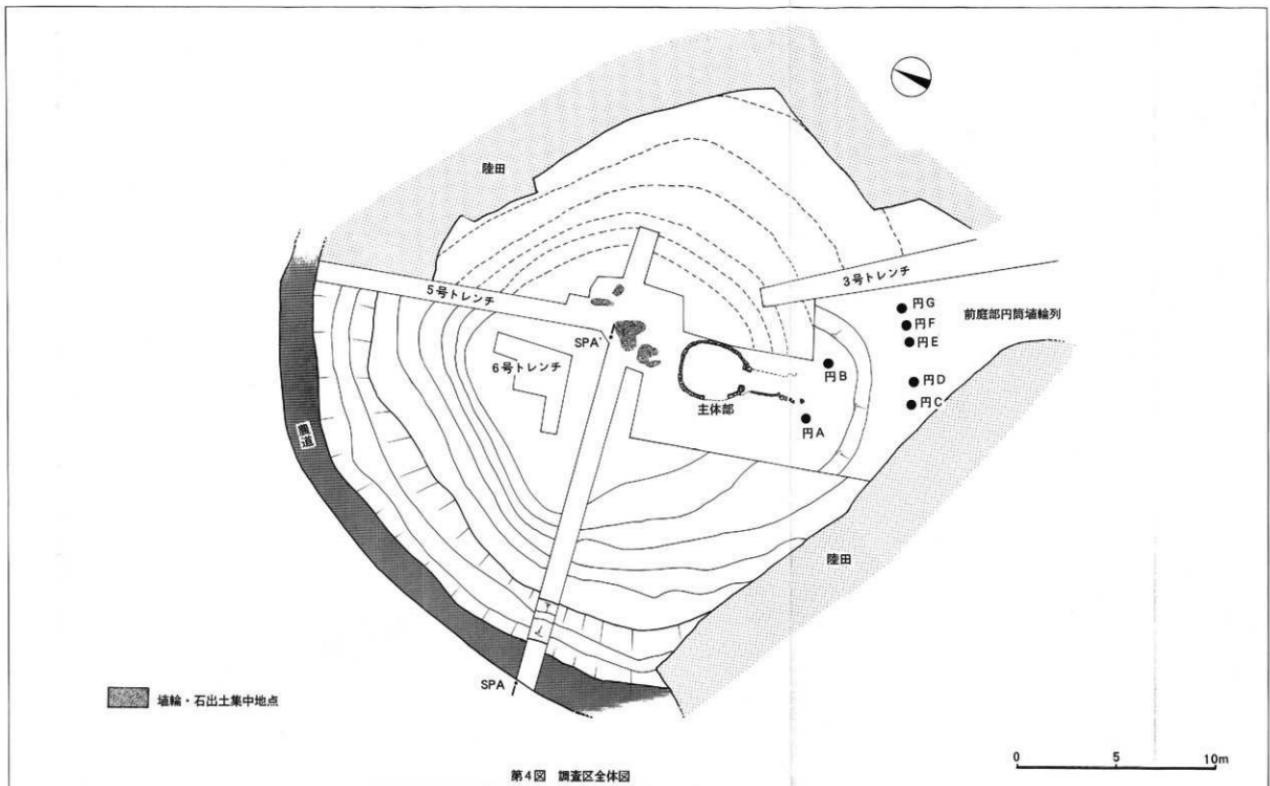
周濠は、墳裾部に幅約2m、深さ約1.3mの掘り込みが確認できた。

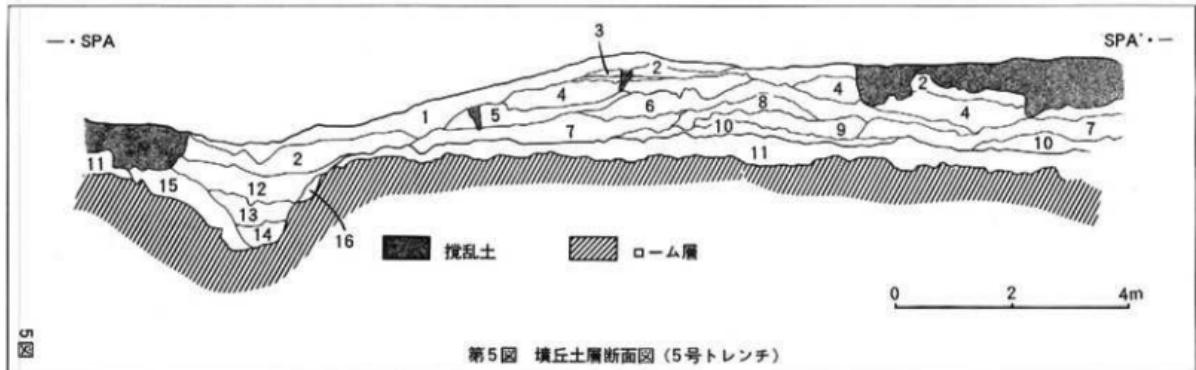
規模・形態からすると、1次調査の結果から地籍図のような形での前方後円墳とは考えられず、東西の長さが約30m程度の円墳であることが有力と考えられる。但し、開発区域外の農地の未調査の部分が多いため、断定は避けたい。

また、埴輪列は墳丘の南東裾部より5体の円筒埴輪が約1~1.5mの間隔で曲線上に並んでいるのが検出され、同様の間隔で墳裾部全体に埴輪列が回っていたものと推定できる。



写真2 墳丘調査





第5図 墓丘土層断面図（5号トレンチ）

5号トレンチ土層注記

- 1層 棕褐色土。現在の表土。
 - 2層 棕褐色土。白色軽石少量含む。
 - 3層 棕褐色土。火山灰を含む。
 - 4層 棕褐色土。カーボン粒子、ローム粒子混在、ロームブロック点在。
 - 5層 暗褐色土。ローム粒子多量に混在、カーボン粒子極少量混在。
 - 6層 棕褐色土。焼土粒子、カーボン粒子少量混在。ローム粒子多量混在。
 - 7層 暗褐色土。焼土粒子少量点在、ローム粒子多量混在。
 - 8層 黄褐色土。カーボン粒子、ロームブロック少量混在。
 - 9層 黄褐色土。カーボン粒子極少量点在、ロームブロック中量混在。
 - 10層 棕褐色土。カーボン粒子極少量点在、ロームブロック少量化点在。
 - 11層 黑褐色土。ロームと黒色土との混土層。(旧表土)
 - 12層 灰黄褐色土。砂質土を均質に混在。
 - 13層 灰黄褐色土。12層に酷似しているが粘性強い。
 - 14層 灰。粘性、しまり強い。
 - 15層 暗褐色土。ロームブロックと黒色土の混土層。
 - 16層 黄褐色土。ローム崩壊土。
- 4~10層
墓丘築成土
- 12~14層
周濠堆積土

2. 主体部（埋葬施設）

南に向かって開口する横穴式石室で、墳丘南斜面に位置している。

盗掘のため天井と側壁4段目以上の石は抜き取られ、人骨は残っていない。側壁3段目の石も玄門部に一部を残すのみである。形態は、玄室と羨道に分かれ、玄室の長さ3.2m、幅1.65～2.63m、羨道の長さ2.55m、幅1.65mを測ることができる。玄室の平面形は橢円形の、いわゆる「胴張り型」を呈している。

石室の全長は約5.7mである。

石室に使用されている石材は、谷田川流域の他の古墳と同じ角閃石安山岩で、卵形の石の5面を削り、積み上げられている。また、玄室の入口にあたる玄門の両脇には長方形の凹みが刻まれた石が一対置かれ、沓石であると考えられる。

石室の裏側は厚さ約50cmの粘土によって補強され、側壁石と粘土の間には小石などで充填されている。小石は礫片が多いが、埼玉県秩父地方を原産地とする緑泥片岩も見られる。

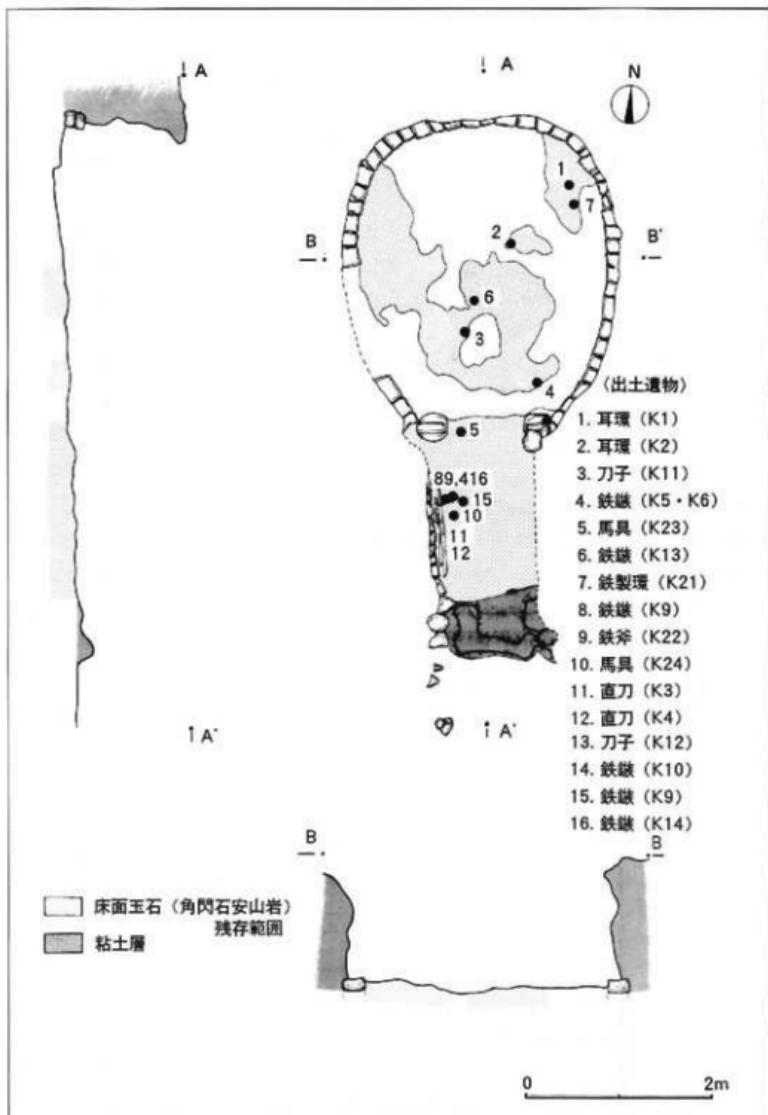
また、石室の床は破壊が著しいものの、一部玉石が敷きつめられた形跡が認められ、比較的羨道内の床面の保存状態は良好である。

羨道入口の玄門にあたる部分には粘土の盛り土が確認でき、石室と外部とは粘土によって塞がれていたと考えられる。

副葬品は、石室内より直刀2口、金銅製耳環2個、鉄鎌12本、刀子4本、馬具2点、鉄斧1点が出土している。耳環、鉄鎌の一部などは玄室から出土しているが、副葬品のほとんどは羨道西側の側壁に集中して出土し、盗掘をまぬがれたものと考えられる。



写真3
主体部
出土状態



第6図 主体部実測図

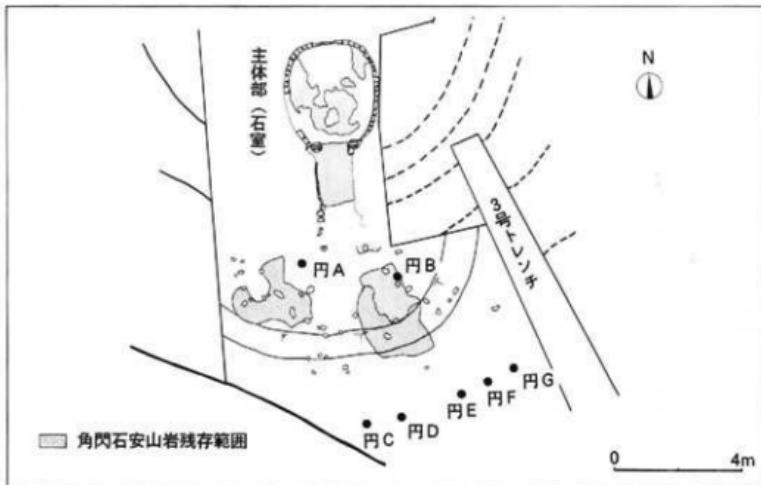
3. 前庭部

石室開口部前面に広がる前庭部からは多数の石が散乱して出土し、また埴輪列の一部も検出できた。前庭部は上下2段になっていることが確認でき、石室入口より南に約4.5m離れた場所で20cmほど下がる。上段は角閃石安山岩の碎石が広範囲に残存し、玉石も散乱する。また、列を呈した円筒埴輪が上段に2体、下段に5体並び、上段の円筒埴輪は比較的保存状態が良く、立った状態で出土しているが、下段の円筒埴輪は埴丘の削平による破損が著しい。

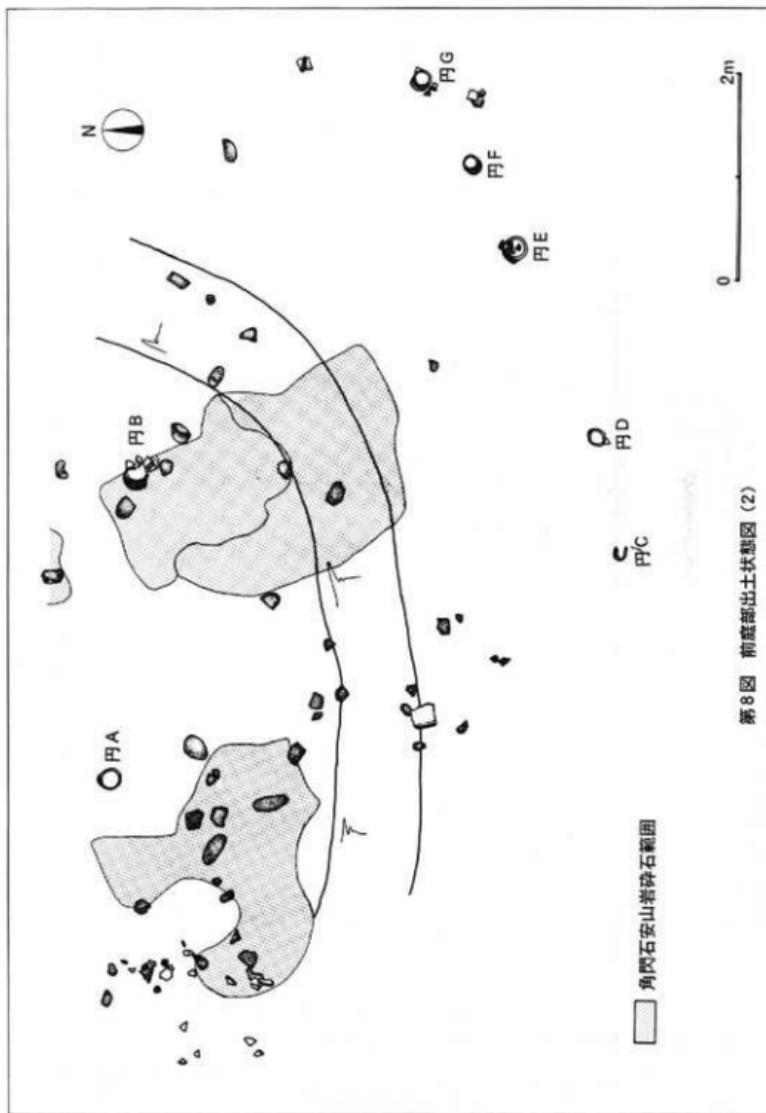
破片として出土した埴輪の多くは円筒埴輪であるが、形象埴輪の一部（人物等）も見られる。また、小型の石製模造品2点と須恵器提瓶1点が出土し、いわゆる祭祀に用いたものと考えられる。



写真4
前庭部出土状態



第7図 前庭部出土状態図(1)



第8図 前壁部出土状況図(2)

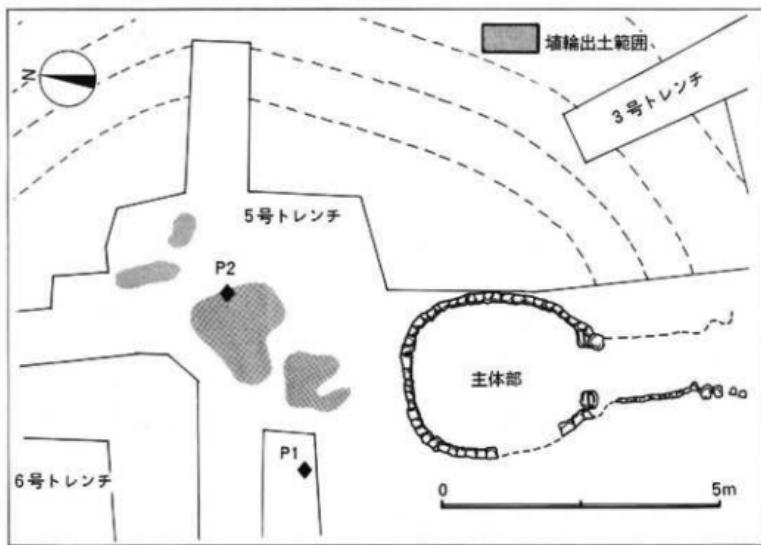
4. その他

5号トレンチ中、墳頂部付近より埴輪が集中して検出された。これは、墳頂部付近の擾乱土を掘り下げて確認されたもので、埴輪は上下に重なり合うように密集して出土した。これらの埴輪のうち復元可能なものは、円筒埴輪が12個体、朝顔形円筒埴輪が7個体、家形埴輪が1個体ある。これらは南東裾部から列を構成して出土した埴輪と同質の埴輪であり、墳丘上あるいは裾部に並べられていたものが後世にまとめて投棄・埋設された可能性が考えられ、この古墳の破壊が著しいことがうかがえる。

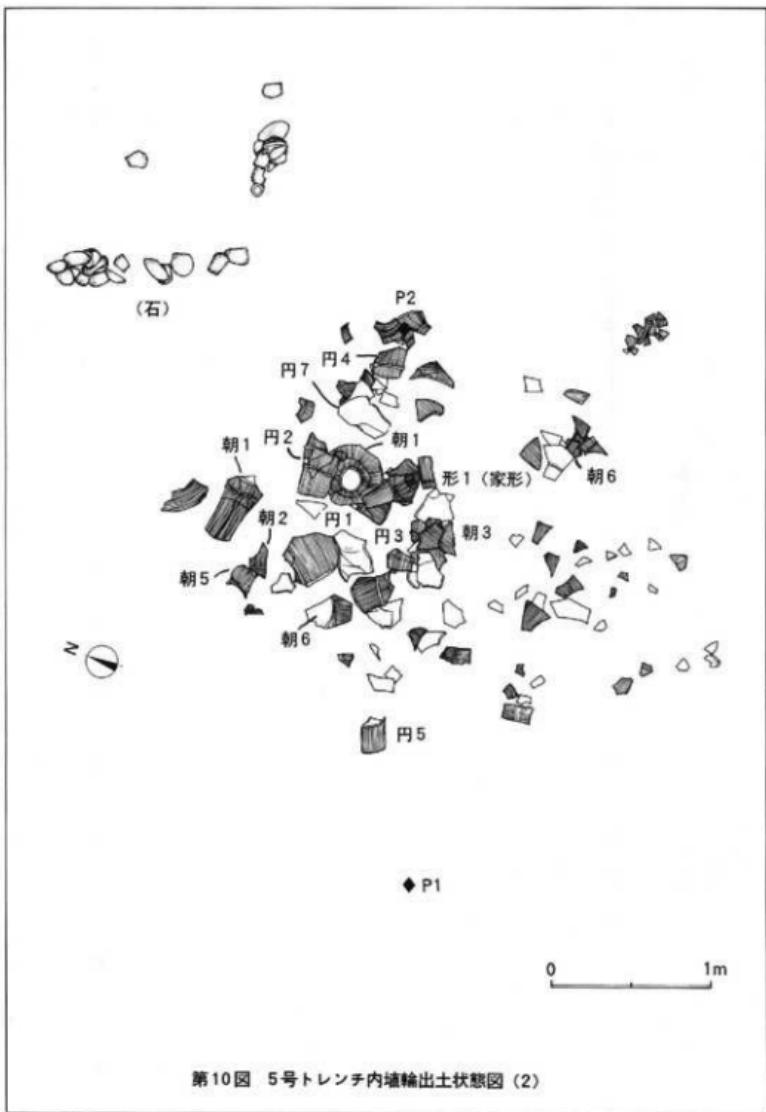


写真5

5号トレンチ内埴輪出土状態



第9図 5号トレンチ内埴輪出土状態図(1)



第10図 5号トレンチ内埴輪出土状態図（2）

IV. 出土遺物

1. 金属製品

金属製品はおもに金銅製の耳環2個（K1・2）と鉄製品（K3～25）が見られ、いずれも主体部から出土した副葬品である。

耳環は主体部玄室の敷石上より出土し、全体が緑青に被われている。一対のものであると考えられる。また、鉄製の環の一部（K21）もその付近より出土している。

鉄製品はおもに直刀、鉄鎌、刀子、馬具等に分けられる。

直刀は主体部羨道西壁際より2口（K3・4）が出土している。そのうち直刀（K3）は切先部が欠損しているが鐔、ハバキ、目釘が残存し、鞘の一部の付着も見られる。現存の刀身の長さは97.7cm、幅4cmで、鐔はやや楕円を呈し最大直径は8.6cmである。直刀（K4）は茎の先端が欠損しているが、現存の刀身の長さは70.8cm、幅2.5cmで、ハバキが残存する。また目釘穴も確認でき、鞘の一部の付着が見られる。また、刀身のほぼ中央部（切先より約33cm）が「く」の字に屈折しているが、埋葬時に故意に屈折したものかあるいは埋葬中に外圧で屈折したものかは不明である。調査後、X線撮影を行ったが象嵌等は認められなかった。

鉄鎌は12点（K5～16）出土し、その多くは直刀付近から出土したものである。すべて有茎鉄鎌で、残存度の比較的良好な鉄鎌の尖頭部の形により大きく三角形式と笠式に分類できる。三角形式は5点（K5～9）出土し、長さ12～15cmを計ることができる。さらに尖頭部が短いものが1点（K5）確認できる。笠は2点（K11・12）出土し、長さ13～14cmを計ることができ、いずれも片刃である。また、茎部分に柄や口巻の一部が付着したものも確認できる。

刀子は4点（K17～20）出土しているが、完形のものはなく刃部ならびに茎部分の破片のみである。一部鞘の痕跡が見られる。

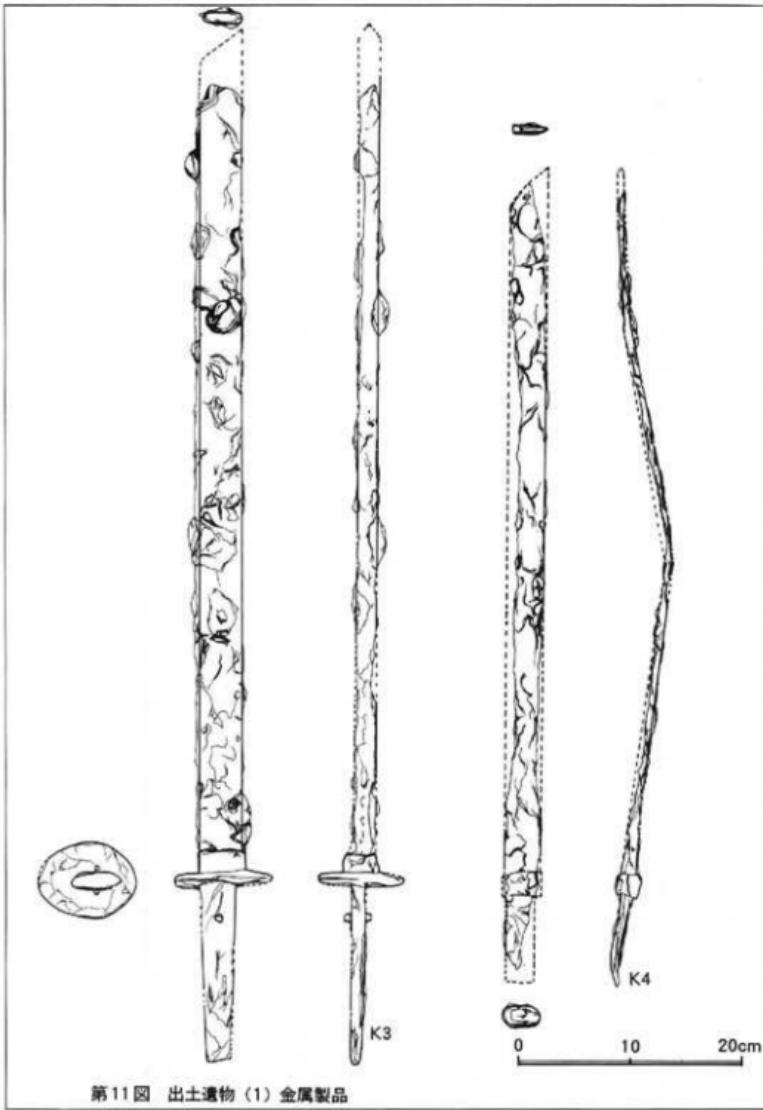
馬具は主体部羨道より3点（K23～25）出土し、いずれも鐔の一部と考えられる。K23は約7cmの鎖状金具を2連繋いだものが屈曲し、両端に絞金具と錐金具が残る。K24も同様に約7cmの鎖状金具が2連繋がれている。

この他、主体部羨道の直刀出土付近より鉄斧（K22）が1点出土している。

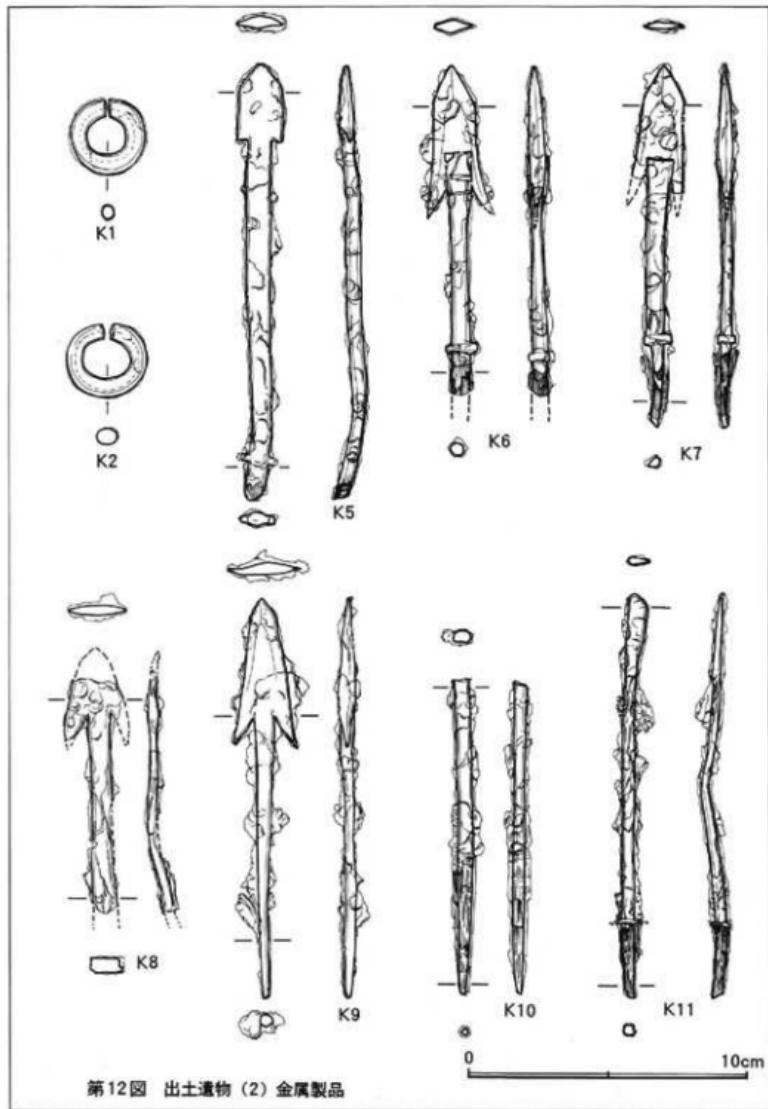
金属製品一覧表

番号	器種・器形	出土位置	残存状態・法量（cm）	摘要
K1	金銅製・耳環	主体部	径（2.8）	
K2	金銅製・耳環	主体部	径（3）	

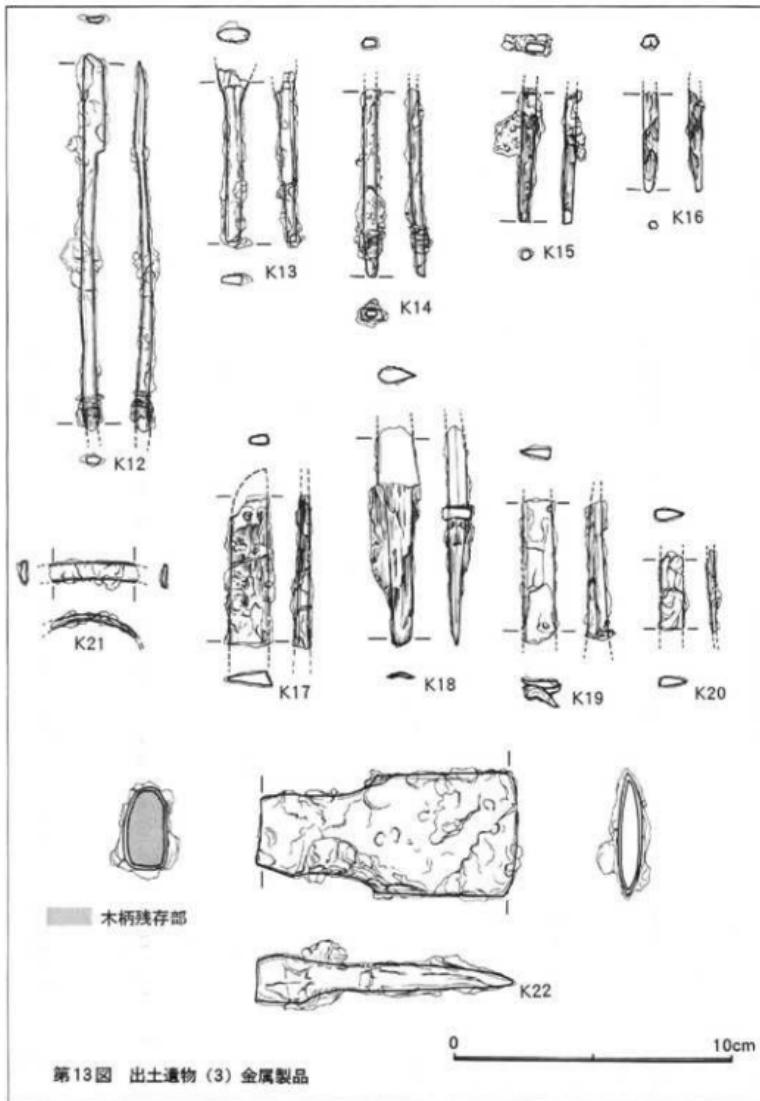
K3	鉄製・直刀	主体部	切先欠損・現存長（97.7）	鐔・ハバキ・目釘1個残存。鞘一部残存。
K4	鉄製・直刀	主体部	長（70.8）	ハバキ・目釘穴残存。鞘一部残存。
K5	鉄製・鉄鎌	主体部	長（15.6）	有茎三角形式鉄鎌（尖頭部短）。木柄残存。
K6	鉄製・鉄鎌	主体部	長（11.5）	有茎三角形式鉄鎌（尖頭部長）。木柄残存。
K7	鉄製・鉄鎌	主体部	長（13）	有茎三角形式鉄鎌（尖頭部長）。木柄残存。
K8	鉄製・鉄鎌	主体部	矢先欠損・現存長（8.5）	有茎三角形式鉄鎌（尖頭部長）。木柄残存。
K9	鉄製・鉄鎌	主体部	長（14.5）	有茎三角形式鉄鎌（尖頭部長）。木柄残存。
K10	鉄製・鉄鎌	主体部	矢先欠損・現存長（11.2）	茎部に口巻痕跡あり。木柄残存。
K11	鉄製・鉄鎌	主体部	長（14.5）	有茎鎧式鉄鎌（片刃）。茎部に口巻痕跡あり。木柄残存。
K12	鉄製・鉄鎌	主体部	長（13.6）	有茎鎧式鉄鎌（片刃）。茎部に口巻痕跡あり。木柄残存。
K13	鉄製・鉄鎌	主体部	茎部・現存長（6.3）	木柄残存。
K14	鉄製・鉄鎌	主体部	茎部・現存長（6.7）	茎部に口巻痕跡あり。木柄残存。
K15	鉄製・鉄鎌	主体部	茎部・現存長（4.8）	茎部に口巻痕跡あり。木柄残存。
K16	鉄製・鉄鎌	主体部	茎部・現存長（3.6）	木柄残存。
K17	鉄製・刀子	主体部	刃部・現存長（5.4）	鞘痕跡残存。
K18	鉄製・刀子	主体部	茎部・現存長（7.9）	木柄残存。
K19	鉄製・刀子	主体部	刃部・現存長（5.1）	鞘痕跡残存。
K20	鉄製・刀子	主体部	刃部・現存長（2.8）	鞘痕跡残存。
K21	鉄製・環	主体部	破片	薄板状。
K22	鉄製・鉄斧	主体部	長（9.3）	取付部分に木柄残存。
K23	鉄製・馬具	主体部	鐔・現存長（9）	2連残存。
K24	鉄製・馬具	主体部	鐔・現存長（15.5）	2連残存。絞貝、継具付帯。
K25	鉄製・馬具	主体部	鐔破片	継貝。



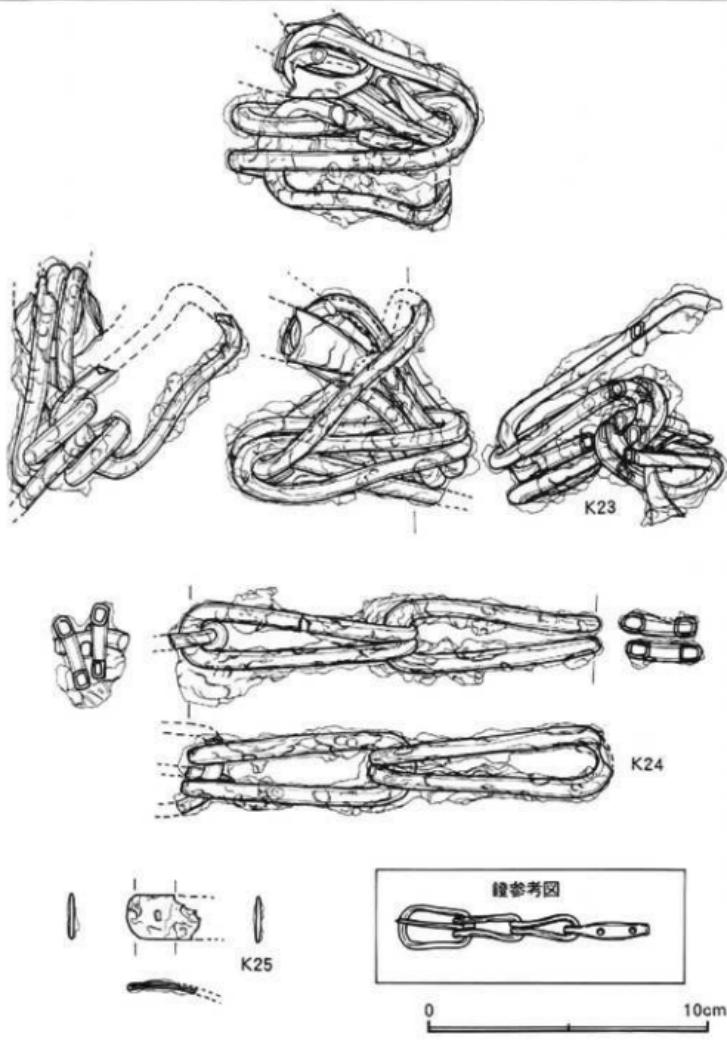
第11図 出土遺物（1）金属製品



第12図 出土遺物(2) 金属製品



第13図 出土遺物（3）金属製品



第14図 出土遺物(4)金属製品

2. 墳輪

(1) 形象埴輪

形象埴輪はおもに家形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪（一部）が見られる。

家形埴輪（形1）は5号トレンチ内から出土したが、一部接合可能な破片の中には墳頂部から出土したものもあり、墳頂部に置かれていたと考えられる。屋根部分と壁部分の接合面は確認できないが、出土位置から判断して同一個体であると推定できる。

屋根部分の形態は入母屋造で上屋根が大きく誇張され、棟上に千木と堅魚木がある。棟上の破損が著しいため堅魚木は一本しか残存しないが、棟の長さが93cmと推定でき、5~6本が乗せられていたと考えられる。また、上屋根から下屋根にかけて中央部が極度に膨らみをもつが軒の部分は現存しない。内部は妻と並行に二面の内壁があり、それぞれに貫通孔が一つずつある。壁部分は底部から23cm現存し、四面のうち二面が確認できる。

人物埴輪（形2~12）は数個体分の出土が確認できるが、そのほとんどは前庭部付近の掘削の際に出土したもので出土状態を記録することができなかった。しかし、ほぼ完形に復元可能な女子像が1個体（形2）の他、男子像の頭部（形5）が1個体、器台と胴部が一体となって現存するものが2個体（形3・4）あるが、頭部と胴部の接合面は確認できない。また、腕と手の部分の破片は他に3組（形6・7・8・9、形8・9は同一個体か）確認できることから、少なくとも4体の人物埴輪が存在したことが推定できる。

女子像（形2）は両手を胸にあてた姿勢をし、頭髪は髪を後ろに結い、小さな首飾りと耳飾りを付ける。衣類の衿はない。男子像頭部（形5）は頭頂部が欠損しているが冠または被り物の痕跡が残り、下げみずらと耳飾りの一部が残る。

いずれも人物埴輪は前庭部に配置されていたと考えられる。

馬形埴輪として推定できるものは、馬具のうち鐙（形13）と杏葉（形14）の一部と考えられる破片と足が2本（形15・16）出土している。足には2本とも底面より幅2.8cm、高さ7.6cmの三角形の切り込みがあり、蹄を表現したものと考えられる。

また、たてがみの一部と思われる破片（形17）もある。

この他、器財埴輪の器台と思われる底部（形18~20）や形象埴輪の一部と思われる破片（形21~33）も出土している。この中で人物と思われるもの（形23・24・25・33）や器財の一部と思われるもの（形21・22・26・27・29~32）、馬形の一部と思われるもの（形28）があるが、全容は不明である。

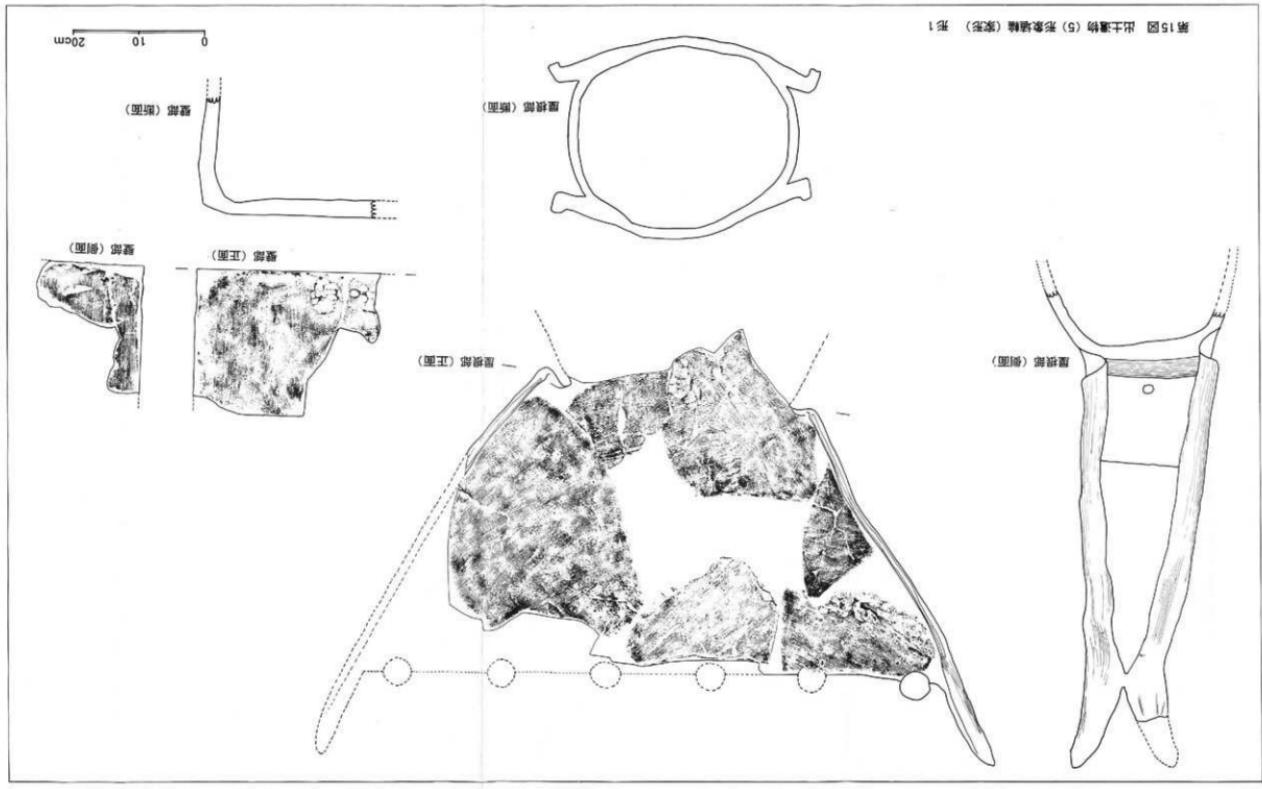
これらの形象埴輪は家形埴輪が墳頂部に、人物や馬形埴輪が前庭部に配列され、他に器財埴輪も存在したことが推定できる。こうしたことから、本古墳は館林周辺において比較的良く形象埴輪が残っていた古墳であるといえる。

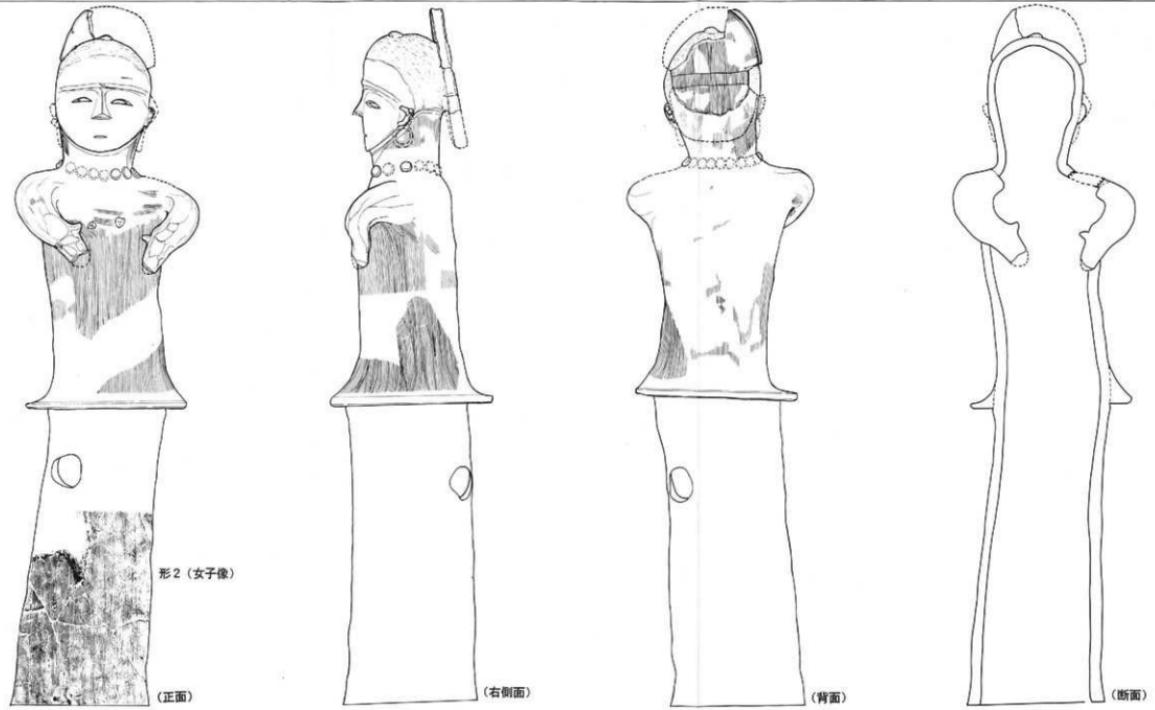
形象埴輪一覧表

番号	器種・器形	出土位置	残存状態・法量(cm)	摘要
形1	埴輪・家形	5トレンチ内	屋根部1/2残存・現存器高(53)・上屋根最大幅(推定93)、壁部1/4残存・現存器高(23)	屋根部は入母屋造。上屋根部分が大きく誇張し、棟上に千木と堅魚木が乗る。 屋根部、壁部とも外面に荒い刷毛目あり。 屋根部分内面一部に荒い刷毛目あり。 屋根部と壁部の接合面不明。明橙色。
形2	埴輪・人物 (女子像)	前庭部付近	全器高(108)	女子像で両手を胸に付ける。頭部に髪を結い小さな首飾り、耳飾りを付ける。胴部・器台部外面に荒い刷毛目あり。器台部に透孔。暗橙色。
形3	埴輪・人物	前庭部付近	胴部、器台部残存・現存器高(73)	胴部・器台部外面に荒い刷毛目あり。器台部に透孔。暗橙色。
形4	埴輪・人物	前庭部付近	胴部(裾)、器台部残存・現存器高(50)	胴部・器台部外面に荒い刷毛目あり。器台部に透孔。明橙色。
形5	埴輪・人物 (男子像)	前庭部付近	頭部(頸頂部欠損)・頭部径(14.5)	冠または被り物の一部欠損。下げみずらと耳飾りの痕跡あり。後頭部外面に荒い刷毛目あり。暗橙色。
形6	埴輪・人物	前庭部付近	胸部、左手	小さな首飾りを付ける。外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。
形7	埴輪・人物	前庭部付近	左手	指の区別あり。外面に一部荒い刷毛目あり。明橙色。
形8	埴輪・人物	2トレンチ内	右手	外面に一部荒い刷毛目あり。形9と同一個体か。明橙色。
形9	埴輪・人物	前庭部付近	左手	外面に一部荒い刷毛目あり。形8と同一個体か。明橙色。
形10	埴輪・人物	前庭部付近	肩部	外面に一部荒い刷毛目あり。明橙色。
形11	埴輪・人物	前庭部付近	脇部(腕の一部残存)	腕の下に透孔の一部が残存。外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。
形12	埴輪・人物	前庭部付近	頭部(額部のみ)	眉、目の一部が残存。明橙色。
形13	埴輪・馬形	2トレンチ内	鞍部(鏡の一部)	内外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。
形14	埴輪・馬形	前庭部付近	鞍部(杏葉の一部)2点	内外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。

形15	埴輪・馬形	前庭部付近	脚部・現存器高 (25)	底部に7cmの三角形の切り込み（跡）あり。形16と同一個体か。外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。
形16	埴輪・馬形	前庭部付近	脚部・現存器高 (26.7)	底部に7cmの三角形の切り込み（跡）あり。形16と同一個体か。外面に一部荒い刷毛目あり。暗橙色。
形17	埴輪・馬形	2トレンチ内	たてがみ	外面に模様あり。暗橙色。
形18	埴輪・器台	前庭部付近	基底部・現存器高 (25.7)・底径 (15.6)	外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形19	埴輪・器台	前庭部付近	基底部・現存器高 (26)・底径 (20.3)	外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形20	埴輪・器台	前庭部付近	基底部・現存器高 (16.5)・底径 (13.6)	突帯、胴部1段目に透孔一部残存。外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形21	埴輪・破片	前庭部付近	器財か？	外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形22	埴輪・破片	2トレンチ内	器財（盾）か？	外面に荒い刷毛目あり。淡橙色。
形23	埴輪・破片	2トレンチ内	人物（裾部）か？	内外面に荒い刷毛目あり。灰橙色。
形24	埴輪・破片	2トレンチ内	人物（裾部）か？	内外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形25	埴輪・破片	前庭部付近	人物（裾部）か？	内外面に荒い刷毛目あり。灰橙色。
形26	埴輪・破片	2トレンチ内	器財か？	内外面に荒い刷毛目あり。淡橙色。
形27	埴輪・破片	前庭部付近	器財か？	外面に荒い刷毛目あり。淡橙色。
形28	埴輪・破片	5トレンチ内	馬（鞍部）か？	内外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形29	埴輪・破片	前庭部付近	器財か？	内外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形30	埴輪・破片	2トレンチ内	器財か？	内外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形31	埴輪・破片	2トレンチ内	器財か？	外面に荒い刷毛目あり。明橙色。
形32	埴輪・破片	前庭部付近	器財か？	外面凹凸装飾あり。明橙色。
形33	埴輪・破片	前庭部付近	人物（裾部）か？	内外面に荒い刷毛目あり。灰橙色。

第15図 出土遺物(5) 瓦當輪軸(瓦軸) 形1



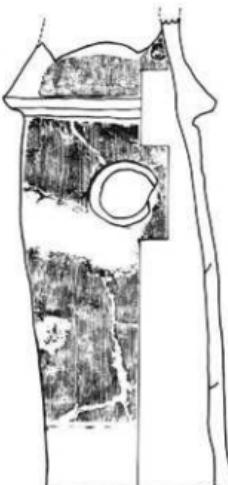


第16図 出土遺物（6）形象埴輪（人物）

0 10 20cm



形3(人物)



形4(人物)



(正面)



(断面)



(左侧面)

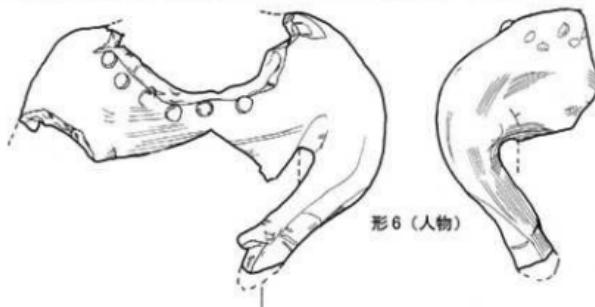


(背面)

形5(男子像)

第17図 出土遺物(7)形象埴輪(人物)

0 10 20cm



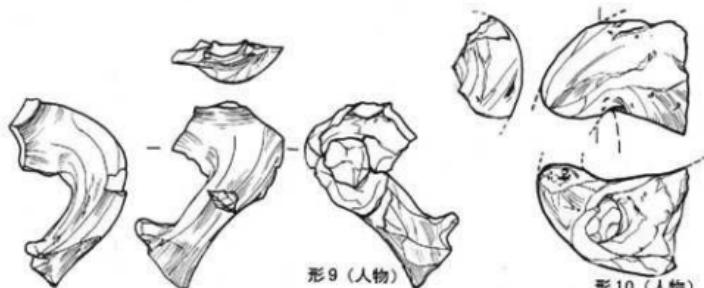
形6(人物)



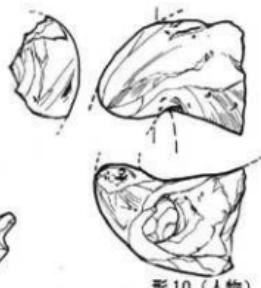
形7(人物)



形8(人物)



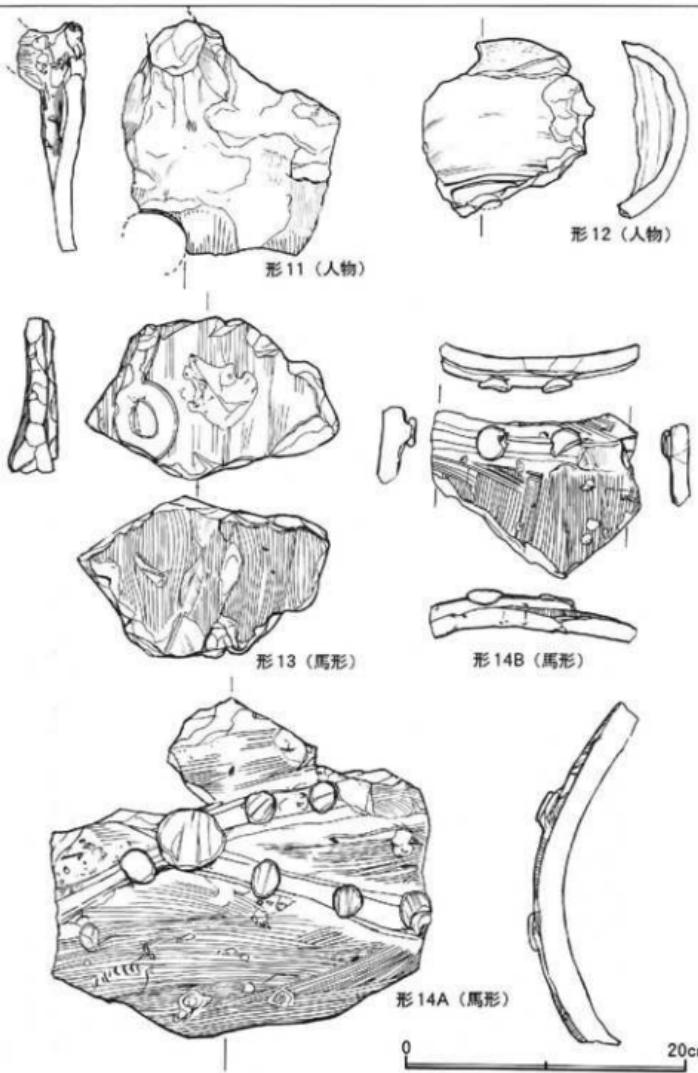
形9(人物)



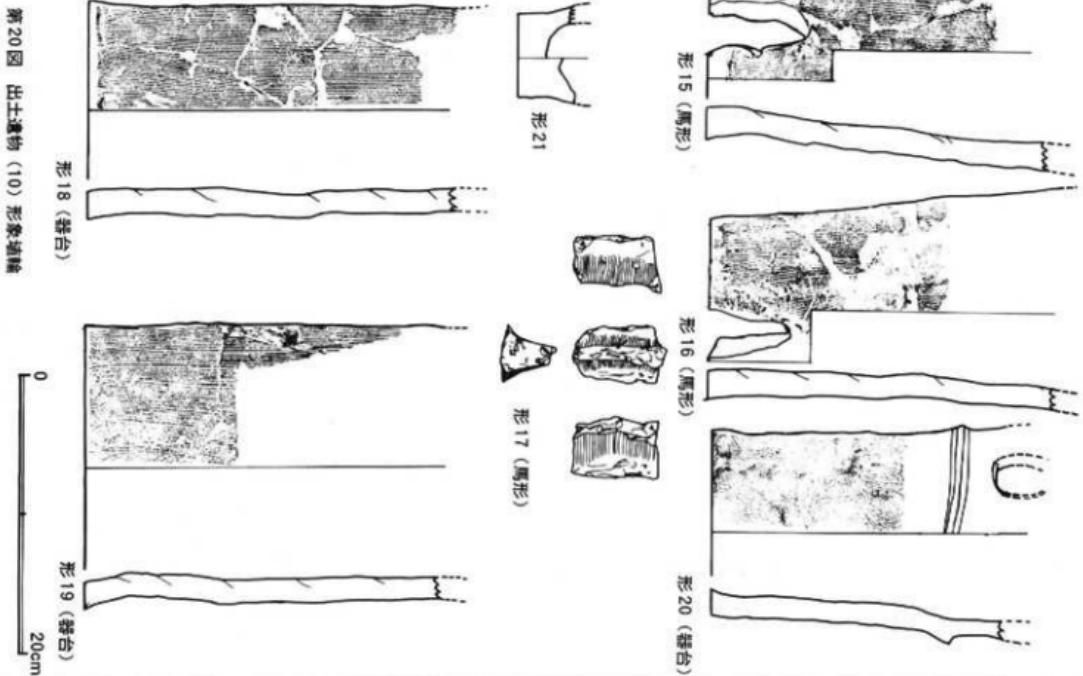
形10(人物)

0 20cm

第18図 出土遺物(8)形象埴輪(人物)

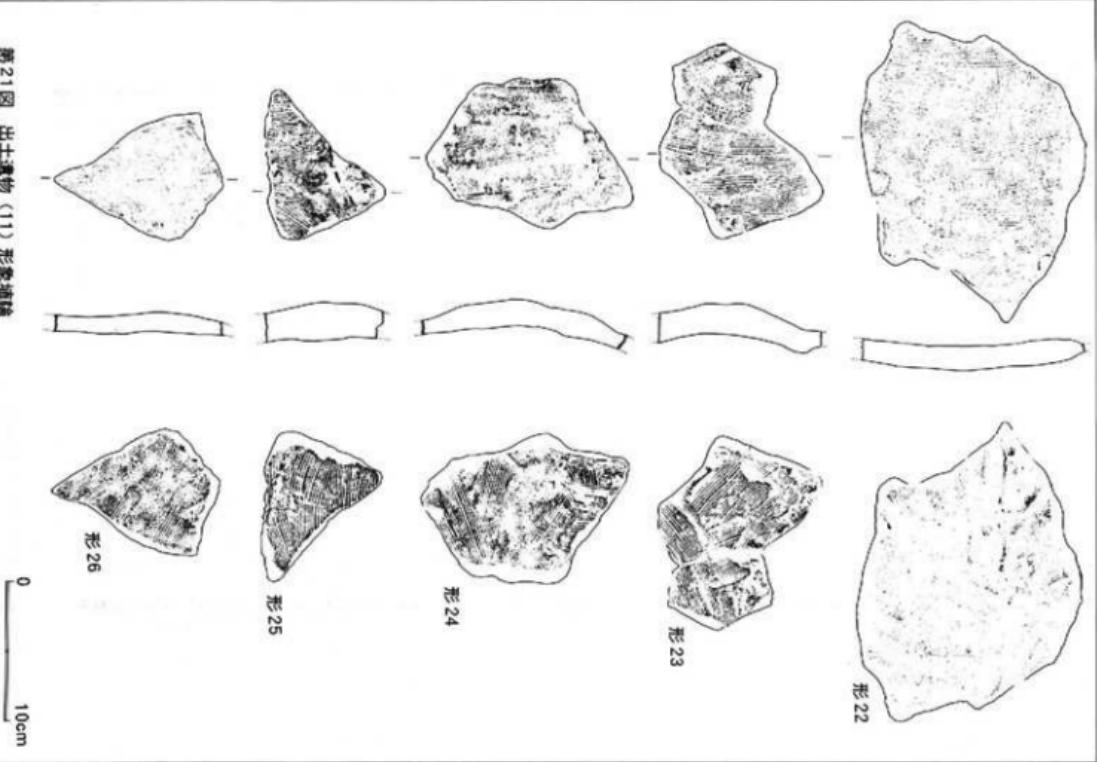


第19図 出土遺物(9)形象埴輪

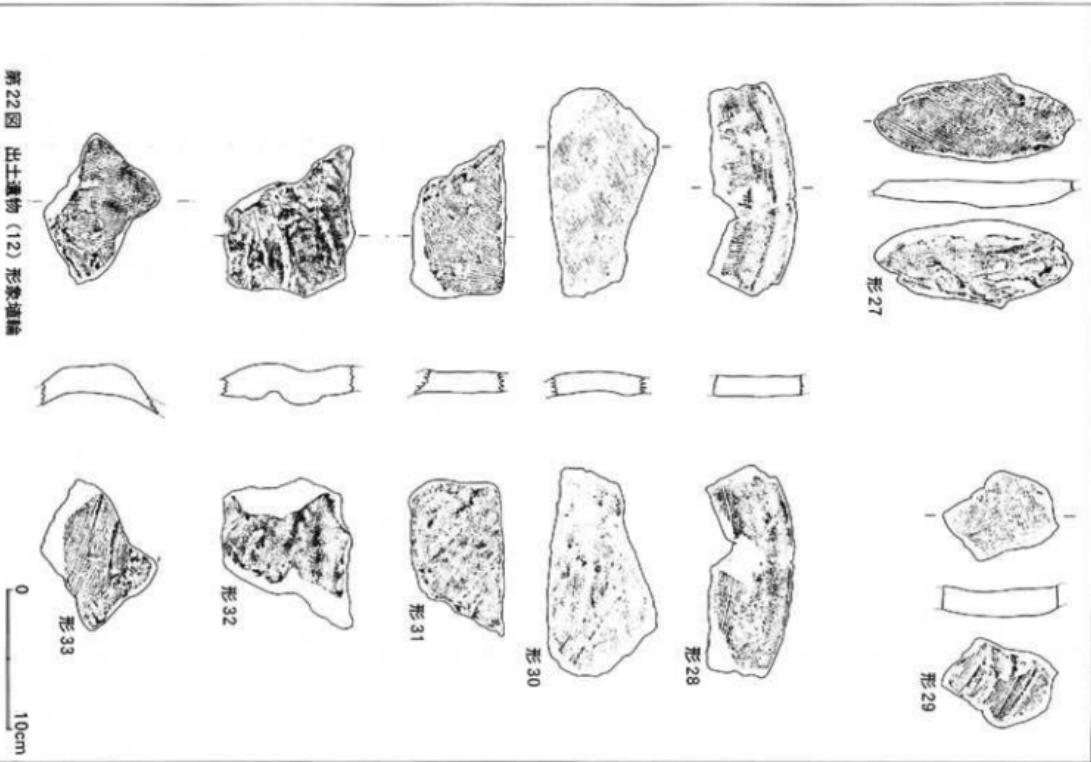


第20図 出土遺物(10)形象埴輪

第21図 出土遺物(11) 形象埴輪



第22図 出土遺物(12) 形象埴輪



(2) 円筒埴輪

円筒埴輪は前庭部より列を呈したまま出土した7個体の埴輪（円A～G）と、5号トレンチ内からまとめて出土した埴輪（円1～12）がある。

前庭部の埴輪列を呈する円筒埴輪は本古墳における埴輪の配列状況がわかるもので、円Aと円Bの2個体の埴輪は主体部羨門より2.4m南に並び、円C～Fの5個体の埴輪はそれよりさらに4.5m外側に並べられ、円筒埴輪が前庭部に2列に並んでいたことが分かる。その間には約20cmの段差がある。主体部側の円Aと円Bは比較的保存状態が良く、特に円Aの埴輪はほぼ完形で出土し、器高約49cmを測定できる。しかし、外側の列の埴輪は後世の埴丘掘削のため破損度が著しく残存度が少ない。

5号トレンチから出土した埴輪は後世にまとめて投棄された形跡があり、配列状況を知ることはほとんど不可能である。そのうち完形、または全体が復元可能な円筒埴輪は5個体（円1～5）あり、そのうち器高が最大のものは54.8cm（円1）あるが、それ以外は50cm前後の器高のものが多い。

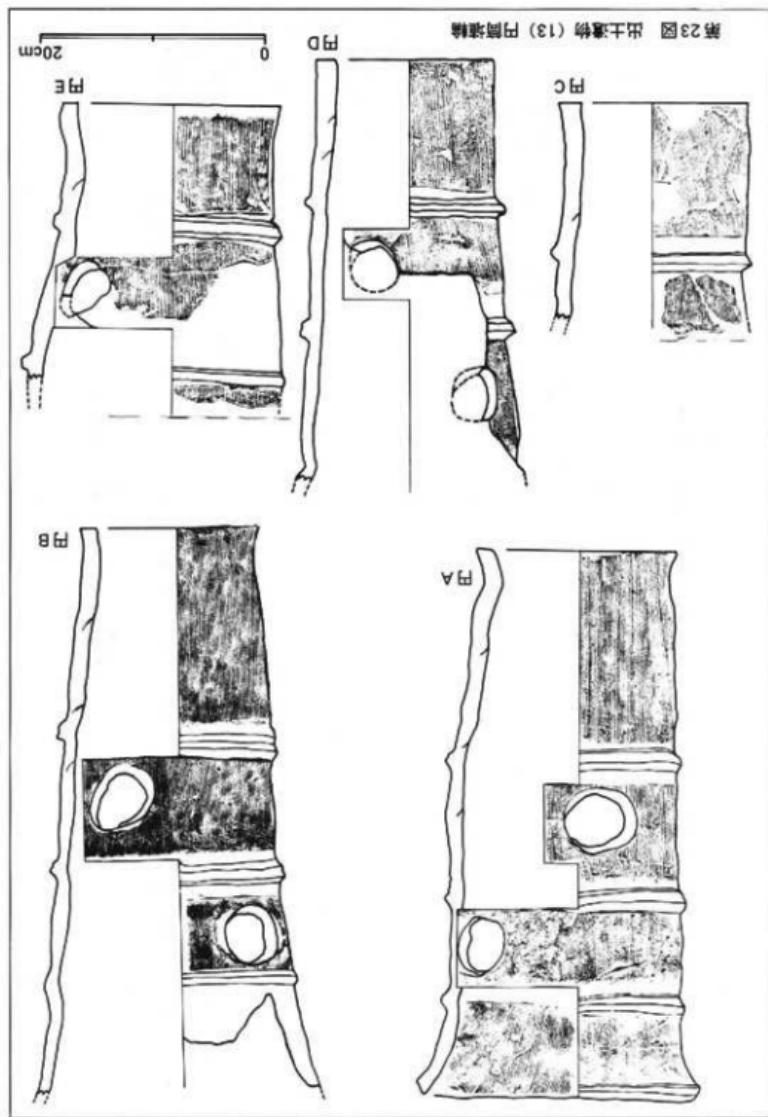
円筒埴輪の形式は一様に基底部、胴部（2段）、口縁部と続き、胴部の第1段と第2段にそれぞれ透孔がある。また、器厚の薄いものは形や大きさがほぼ一定しているが、器厚が厚く鈍重な感じのするものは底径に大小のばらつきが見られる。

その他、5号トレンチからは7個体分の円筒埴輪（円6～12）が出土しているが、いずれも基底部もしくは口縁部である。また、この他に復元不可能な埴輪片がパンケース10箱分出土し、本古墳では前庭部を含め円筒埴輪が9個体以上存在したことが分かる。

円筒埴輪一覧表

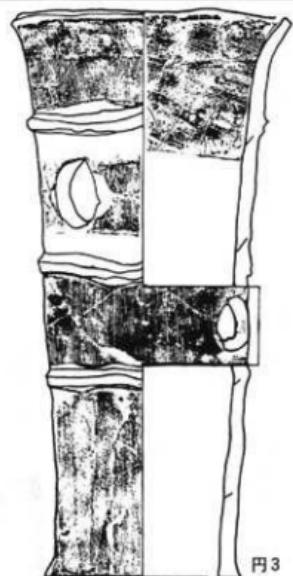
番号	器種・器形	出土位置	残存状態・法量（cm）	摘要
円A	埴輪・円筒	前庭部 埴輪列	器高（49.3）、口径 (30.5)、底径（17.8）	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。淡橙色。
円B	埴輪・円筒	前庭部 埴輪列	口縁部欠損・残存器高 (50)、底径（16）	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。淡橙色。
円C	埴輪・円筒	前庭部 埴輪列	基底部、胴部1段残存・ 底径（17）	透孔胴部1段目にあり。外面荒い刷毛目あり。暗橙色。
円D	埴輪・円筒	前庭部 埴輪列	基底部、胴部1、2段残存・ 底径（16）	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面荒い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。暗橙色。

円E	埴輪・円筒	前底部 埴輪列	基底部、胴部1、2段残存・ 底径 (19.5)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目あり。暗橙色。
円F	埴輪・円筒	前底部 埴輪列	基底部、胴部1、2段残存・ 底径 (13)	透孔胴部1段目にあり。外面荒い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。明橙色。
円G	埴輪・円筒	前底部 埴輪列	基底部、胴部1、2段残存・ 底径 (15.5)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面荒い刷毛目あり。明橙色。
円1	埴輪・円筒	5トック内	器高 (54.8)、口径 (30.3)、底径 (19.1)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。淡橙色。
円2	埴輪・円筒	5トック内	器高 (50.1)、口径 (29.8)、底径 (16.7)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。明橙色。
円3	埴輪・円筒	5トック内	器高 (49.8)、口径 (25)、 底径 (17.5)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に細い刷毛目あり。橙色。
円4	埴輪・円筒	5トック内	器高 (50.4)、口径 (26.4)、底径 (16.7)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。橙色。
円5	埴輪・円筒	5トック内	器高 (65)、口径 (29.5)、 底径 (16.5)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。暗橙色。
円6	埴輪・円筒	5トック内	基底部、胴部1、2段残存・ 底径 (19.5)	透孔胴部1段目、2段目にあり。外面細い刷毛目あり。橙色。
円7	埴輪・円筒	5トック内	基底部、胴部1段残存・底径 (16.5)	透孔胴部1段目にあり。外面荒い刷毛目あり。明橙色。
円8	埴輪・円筒	5トック内	口縁部残存・口径 (27)	透孔胴部2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。明橙色。
円9	埴輪・円筒	5トック内	口縁部残存・口径 (27)	透孔胴部2段目にあり。外面細い刷毛目、内面上部に荒い刷毛目あり。橙色。
円10	埴輪・円筒	5トック内	基底部、胴部1段残存・ 底径 (12)	透孔胴部1段目にあり。外面荒い刷毛目あり。橙色。
円11	埴輪・円筒	5トック内	基底部残存・底径 (21)	外面荒い刷毛目あり。暗橙色。
円12	埴輪・円筒	5トック内	基底部残存・底径 (20.5)	外面荒い刷毛目あり。暗橙色。

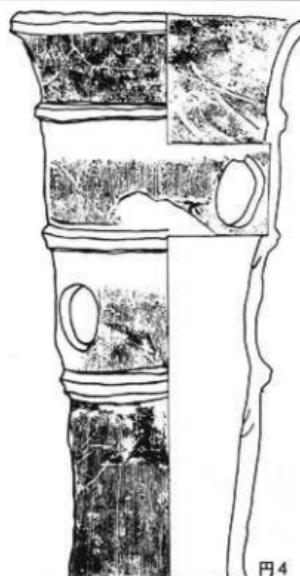




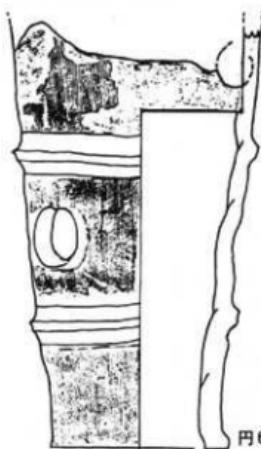
第24図 出土遺物 (14) 円筒埴輪



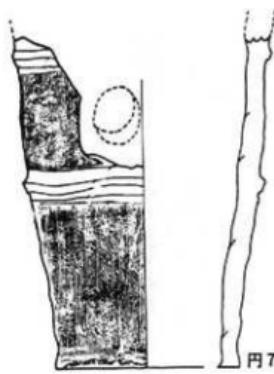
円3



円4



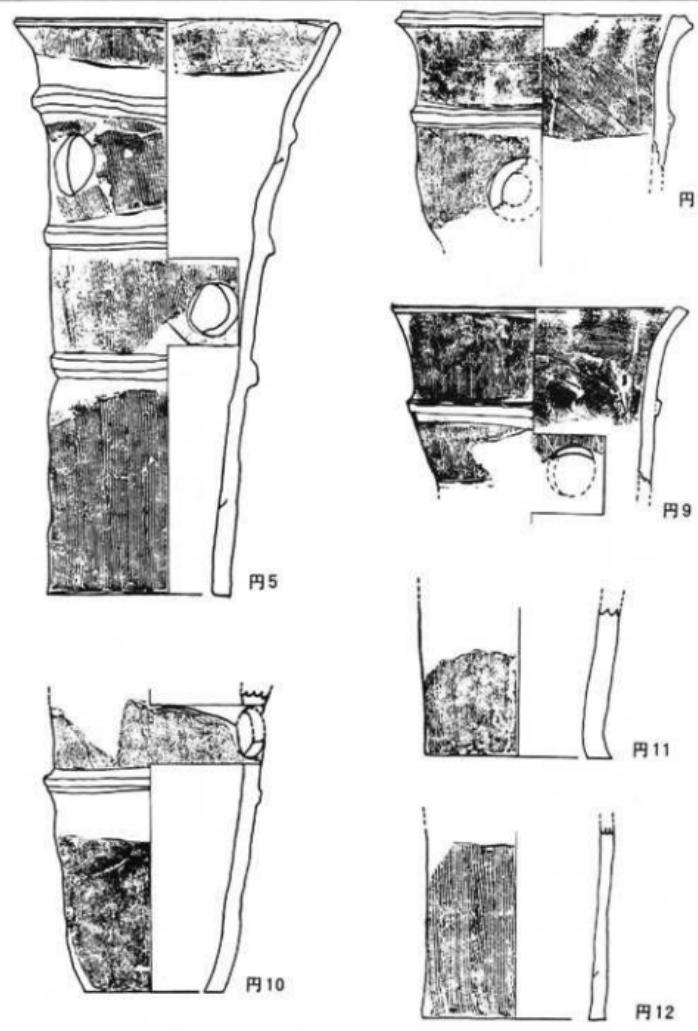
円6



円7

0 20cm

第25図 出土遺物 (15) 円筒埴輪



第26図 出土遺物 (16) 円筒埴輪

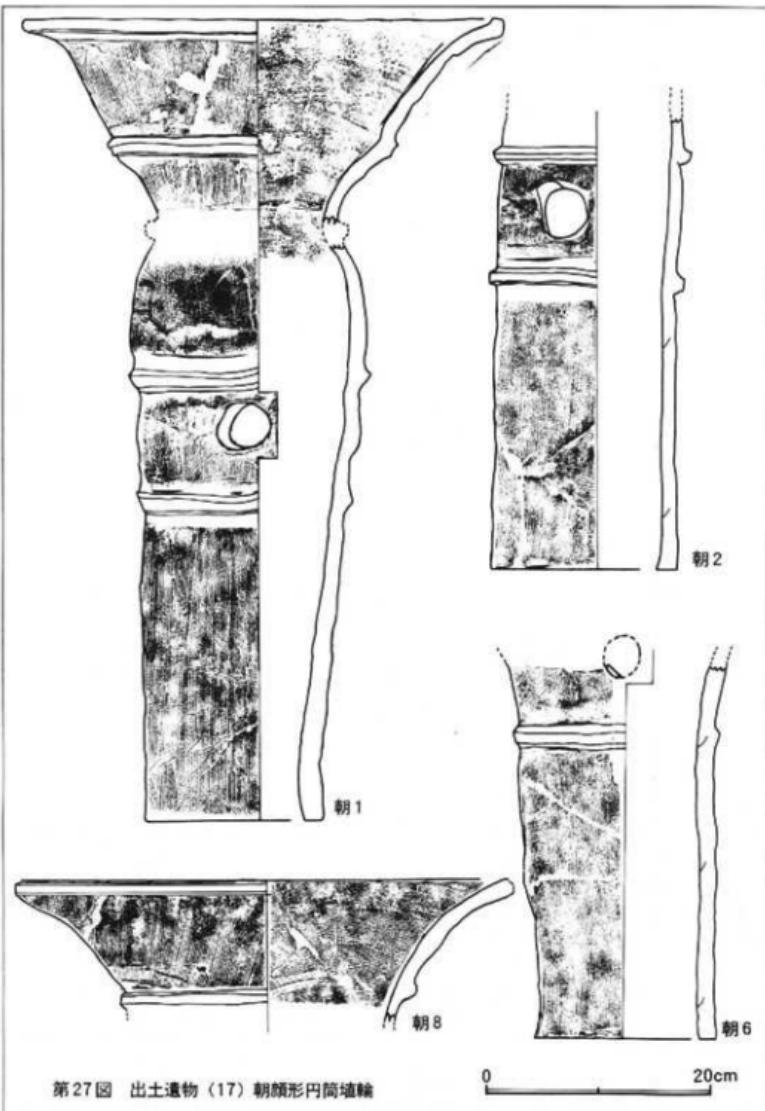
(3) 朝顔形円筒埴輪

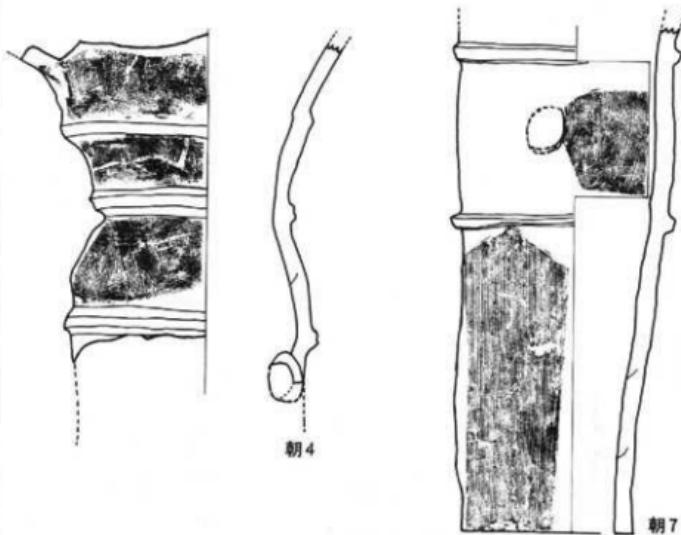
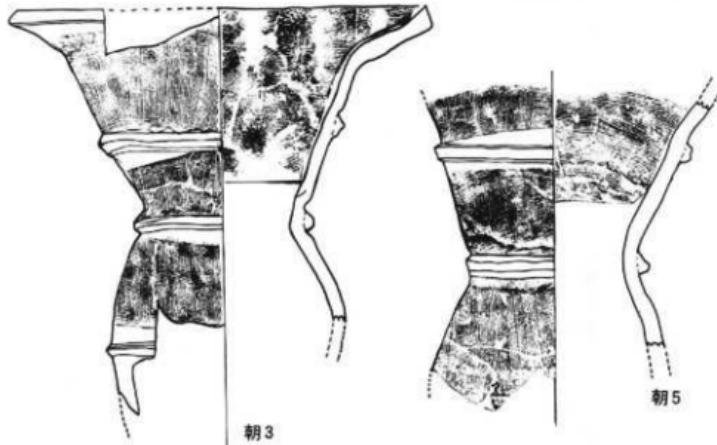
朝顔形埴輪のほとんどは5号トレンチ内からの出土である。全体が復元できるものは1個体(朝1)あり、頸部に一部欠損が見られるものの全体の器高は69cmある。うち円筒部の器高は51cmで突堤の上にある胴部に透孔がある。朝顔部の器高は18cmで2段に別れ、口径42.6cmで、円筒部に比較して大きく広がる。

その他、頸部と朝顔部が残存するものが3個体(朝3~5)、円筒部と頸部が残存するものが3個体(朝2・6・7)ある。また、この他復元不可能な埴輪片がパンケース2箱分出土していることから、少なくとも7~8個体の朝顔形円筒埴輪が存在したことが考えられる。しかし、古墳築造時の配列等を知ることはほとんど不可能である。

朝顔形円筒埴輪一覧表

番号	器種・器形	出土位置	残存状態・法量(cm)	摘要
朝1	埴輪・朝顔	5トレンチ内	器高(69)、口径(42.6)、底径(15.9)	透孔胴部があり。外面細い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。明橙色。
朝2	埴輪・朝顔	5トレンチ内	基底部、胴部残存・底径(16.5)	透孔胴部があり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。淡橙色。
朝3	埴輪・朝顔	5トレンチ内	朝顔部、頸部、胴部残存・口径(38)	透孔胴部があり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。暗橙色。
朝4	埴輪・朝顔	5トレンチ内	朝顔部(口縁部欠損)、頸部胴部残存	透孔胴部があり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。明橙色。
朝5	埴輪・朝顔	5トレンチ内	朝顔部(口縁部欠損)、頸部残存	外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。明橙色。
朝6	埴輪・朝顔	5トレンチ内	基底部、胴部残存・底径(16.5)	透孔胴部があり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。淡橙色。
朝7	埴輪・朝顔	5トレンチ内	基底部、胴部残存・底径(15.5)	透孔胴部があり。外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。灰橙色。
朝8	埴輪・朝顔	5トレンチ内	朝顔部口縁部・口径(44.5)	外面荒い刷毛目、内面上部荒い刷毛目あり。灰橙色。





第28図 出土遺物(18) 朝顔形円筒埴輪

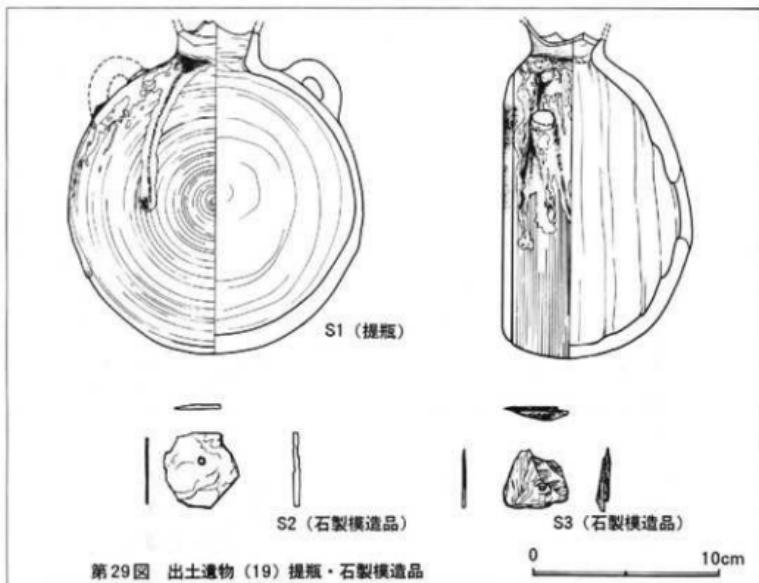
0 20cm

3. その他の遺物

本古墳より出土した遺物のうち金属製品、埴輪を除いた遺物として、須恵器提瓶（S1）と石製模造品（S2・3）がある。

提瓶は前庭部から出土し、口頸部が破損しているものの肩に環状の吊手2個のうち1個が残存し比較的の保存状態は良い。石製模造品も前庭部から出土し、形は小型で不定形をし、小孔1個が開けられ、有孔石板と考えられる。いずれも祭祀用のものである。

番号	器種・器形	出土位置	残存状態・法量(cm)	摘要
S1	須恵器・提瓶	前庭部	口頸部一部破損、吊手1個破損。最大径(18)、厚(10.2)	表面に灰釉残存。
S2	石製模造品	前庭部	現存径(4)	中央に小孔1個あり。
S3	石製模造品	前庭部	現存径(3.3)	中央に小孔1個あり。



第29図 出土遺物(19) 提瓶・石製模造品

V. 調査のまとめ

1. 渕ノ上古墳の年代について

谷田川流域の古墳同様、石室には榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩が使用されており、6世紀中頃以降の築造となる。

埴輪を伴うことは、舟山古墳、道明山古墳、天神下古墳、松之木古墳、中古墳など共通例が多いが、渕ノ上古墳の北西約500mに位置する筑波山古墳ではこれまでの調査で遺構と結びつく埴輪の出土例が見られない。

渕ノ上古墳においては、出土した埴輪片は円筒埴輪だけでなく、遺構とは結びつかないものの形象埴輪や朝顔形円筒埴輪も数多く見られる。こうしたことから、本古墳は谷田川流域に分布する古墳群の中でも比較的早い時期に築造されたものと推定される。

2. 渕ノ上古墳と利根川中流域の古墳

館林市とその周辺の古墳は、地理的環境によりいくつかの「地域」に分けられる。つまり高根古墳群、日向古墳群、中日向古墳群（栃木県足利市）、松本古墳群（邑楽町）などの矢場川流域に分布するグループと、渕ノ上古墳、筑波山古墳（板倉町）、稲荷塚古墳（明和村）などの谷田川流域に分布するグループである。

今回の発掘調査により、渕ノ上古墳は立地以外の点で谷田川流域の古墳群と共通性があることが判明している。それは、石室に使用された石材と玄室の平面形の2点である。

楕円形の玄室は「胴張り型」と呼ばれ、群馬・埼玉を対象とするこれまでの研究では、羽子板・小判・三昧線・馬蹄の4つの型に分類されている。このうち渕ノ上古墳の石室の平面形は馬蹄形に該当する。

周辺の古墳と同じ形の石室を有していたのは筑波山古墳と稲荷塚古墳である。

筑波山古墳は国道354号線バイパスの北側の集落内に所存する全長約53.5mの前方後円墳である。現在、筑波山神社の境内地になっているが、昭和8年の社の建替えの際に石室が発見されている。当時の郷土史家飯塚多右衛門氏はこの状況を示す写真を撮影し（写真7 館林市立資料館蔵）、「昭和8年12月25日伊奈良村大字岩田風張筑波神社境内整理ノ為底内掘下シナス際古墳ニ掘リ当リ中ヨリ人骨及金環等ヲ発掘ス。写真ハ墓ノ周囲ノ石垣ノ一部ナリ昭和8年12月26日



写真6 渕ノ上古墳出土 角閃石安山岩

撮影」という説明を添えている。その写真によると玄室は測ノ上古墳と同じ馬蹄形を呈するものと推定できる。また、石室に用いられた角閃石安山岩の一部は現在、神社の階段に利用され、境内には天井石に用いられた栃木県葛生町産出の石灰石を見ることができる。

稻荷塚古墳は現存しないが、昭和28年群馬大学によって発掘調査が行われている。『明和村誌』(1985年刊)に掲載された石室平面図を見ると、玄室の長さ、幅が測ノ上古墳と同様な石室であったことが推定できる。

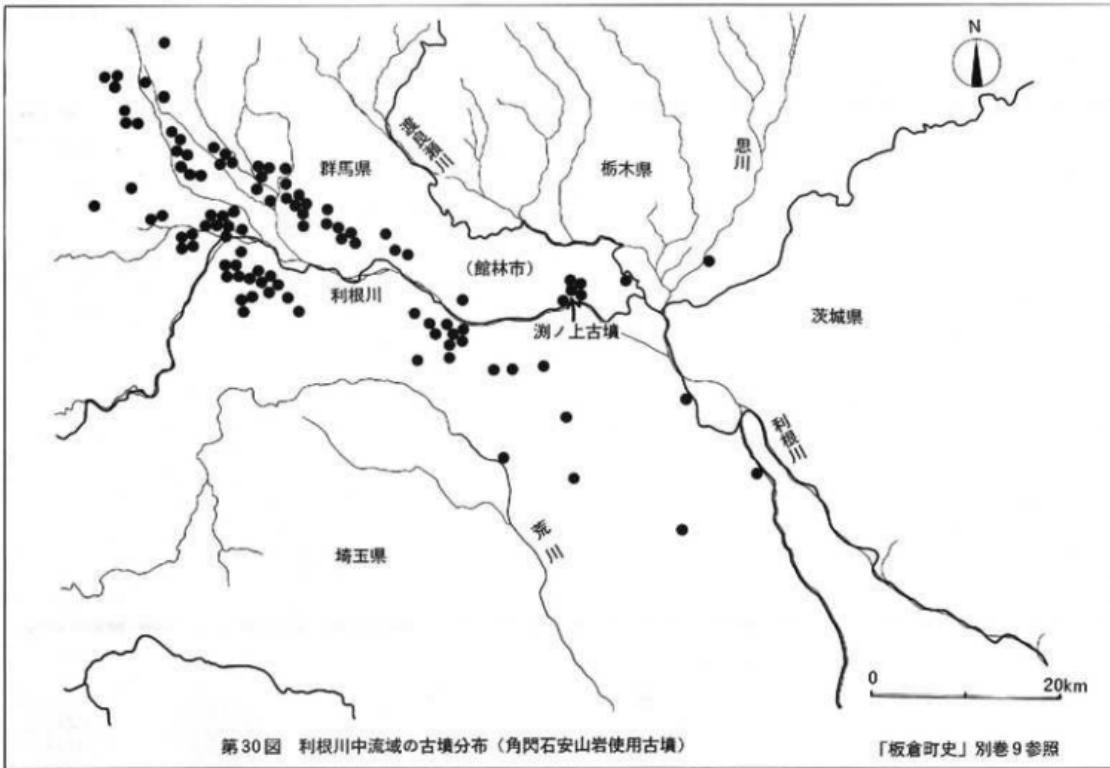
群馬県内における「胴張り型」石室は、羽子板形と小判形が多く、馬蹄形の分布は谷田川流域に限られる。埼玉県では本庄台地や高麗川流域に分布が見られるが、谷田川流域とのかかわりは不明である。

以上のことから谷田川流域の3古墳（測ノ上・筑波山・稻荷塚）は、6世紀後半において館林市、板倉町、明和村の境界周辺に「地域」を形成していたものと考えられる。生産域は谷田川を含む低地帯と思われるが、居住域である集落址は現在のところ発見されていない。遺跡分布調査における台地上に散布する遺物は奈良・平安時代のものが多く、古墳群に見合う古墳時代後期の遺物が散布する包蔵地は見あたらない。関東平野にいくつかの事例が見られるローム台地が埋没している現象などから、当地域においても古墳を築いた人々の居住域が河川の氾濫によって運ばれた土砂で埋没していることも考えられる。

次に、測ノ上古墳の石室と同様に角閃石安山岩を使用した石室を持つ古墳の分布を見ると、利根川流域（支流を含む）に顕著に現れていることが分かる（第30図）。特に榛名山の噴火により噴出した軽石であることから、群馬県内にその数は集中しているが、栃木・埼玉・茨城県内に



写真7
筑波山古墳石室
(飯塚多右衛門氏撮影)
昭和8年



も利根川およびその支流に沿ってかなり広範囲に分布している。

測ノ上古墳は、群馬県内に集中する角閃石安山岩使用の古墳のグループとは地域的に隔たりが見られ、利根川中流域の中でも下流部に位置する。同様の古墳が周辺の埼玉・茨城県内にも見られ、特に石室が観察できる古墳（復元を含む）も存在する。中でも、利根川南岸の埼玉県行田市若小玉にある八幡山古墳では全長16.7mの露出した横穴式石室を見ることができ、側壁に用いられている石の一部に角閃石安山岩が使用され、天井石は埼玉県秩父地方産出の緑泥片岩が使用されている。測ノ上古墳においても側壁の裏側に緑泥片岩が使われていることから、角閃石安山岩同様、この地方特有の石材であることがうかがえる。石室の内部は3室に分かれているものの、わずかに「胴張り型」が見られる。

さらに利根川下流に位置する茨城県猿島群五霞村川妻にある穴薬師古墳も同じく、石室に角閃石安山岩が使用され、平面形は「胴張り型」を呈した古墳である。

この他、利根川を挟み、測ノ上古墳の約2km南にある埼玉県羽生市下村君にも古墳群が存在し、そのうち永明寺古墳は全長約78mの前方後円墳で、これまでの調査により緑泥片岩を使用した竪穴式石室が検出され、6世紀前半の築造と推定されている。

古墳時代の利根川の流路を想定するのは現況では困難であるが、角閃石安山岩使用の石室の分布を考慮するとともに、測ノ上・筑波山・稻荷塚の3古墳に見られる石室の平面形（馬蹄形の玄室）が群馬県内であまり類似例が見られないことから、測ノ上古墳の属する地域が利根川南岸に広がる可能性もあることも考えられ、利根川の対岸にあたる地域の古墳との関連性を重視することが今後の課題といえる。



写真8
筑波山古墳
(板倉町)
神社階段に使用
されている角閃
石安山岩

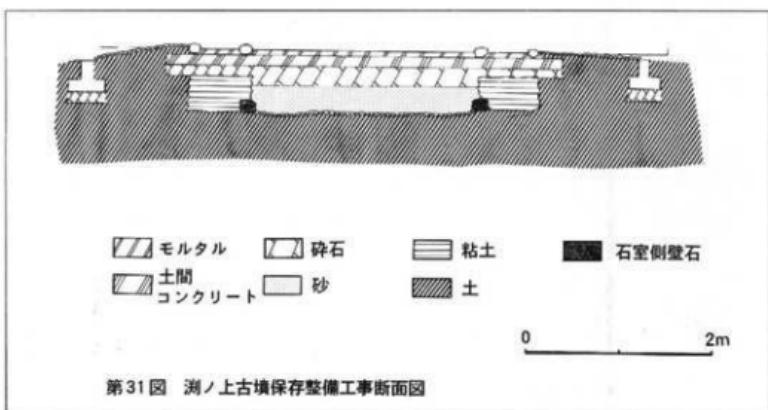
3. 渕ノ上古墳の整備

渕ノ上古墳は、館林市で初めて横穴式石室が検出された古墳であり、角閃石安山岩を使用する「胸張り型」の石室が地域的特徴を持つものであることから、調査終了後、石室の現状保存が検討された。保存の対象とされたのは石室側壁の石が残る部分で、建設予定の公園のグランドレベルの設計高より下にあることから、石室の基礎になる部分の記録保存は行わず、そのまま山砂で埋め戻した。

石室の保存整備工事は、公園に遊戯施設が設置された後に実施された。側壁の石が残らない4段目以上を削平し、地表面をモルタルで覆い、石室とそれを含む粘土の平面プランを玉石で表示し、南に開口する横穴式石室のしくみ（前庭部・玄室・羨道）や馬蹄形の玄室の様子が学習できるように配慮した。なお、石室に使用されていた角閃石安山岩は調査時に採取した一部を除き、すべて出土状態のまま埋め戻して保存したため、復元の平面プランに使用した石材は角閃石安山岩を使用することができなかった。



写真9 整備後の渕ノ上古墳



第31図 渕ノ上古墳保存整備工事断面図

〈付記〉館林市指定史跡「山王山古墳」について

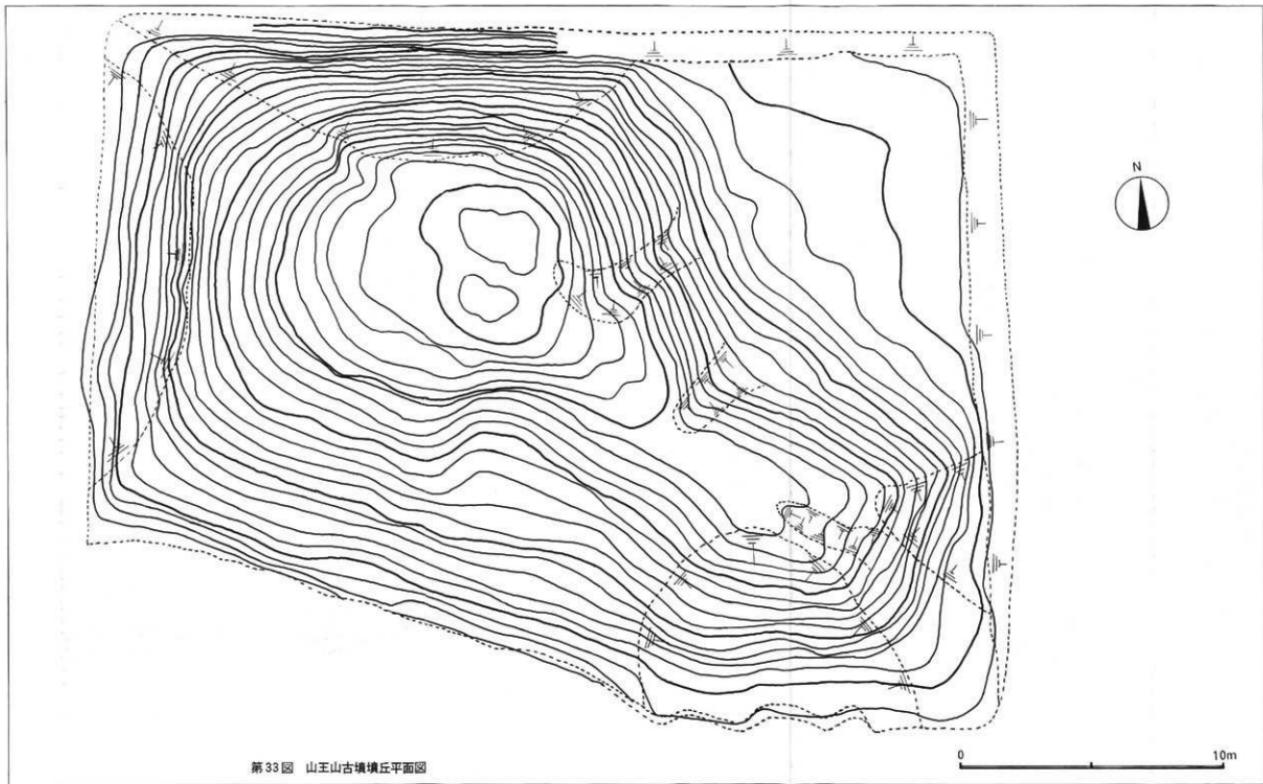
市の史跡に指定されている山王山古墳は当郷町1975-2の善長寺境内地に位置し、城沼の北岸の洪積台地上に築かれた前方後円墳で、市内で最も墳丘の保存状態の良い古墳である。

『上毛古墳総覧』(1938年刊)では当時の郷谷村に「第一号」「第二号」「第三号」と3基の古墳が登載され、「第一号」に「山王山」と名称が付され、前方後円墳の形状であることが記されている。「第二号」「第三号」は円墳の形をしたもので、当時の番地から山王山古墳と隣接していたことがわかるが、現在は消滅している。地元の聞き取り調査によれば「二の山」と呼ばれていた小高い土盛りが昭和20年代まで存在していたことが確認できる。また、山王山古墳の出土遺物として「金環、刀十口」が記載されており、その一部が現在も善長寺に保管されている。

昭和59年、墳丘の保存整備を行うため墳丘周辺の一部を発掘調査し、さらに墳丘の現況平面図を作成した。

墳丘の現況は北側に県道があり、昭和44年の県道拡張の際、後円部の一部が削平されているもののほぼ原型をとどめているといえる。現況では長さ47m、後円部径37m、高さ5mを測ることができ、後円部の軸は北西を向いている。





第33図 山王山古墳埴丘平面図

発掘調査により、周濠と思われる溝の一部が確認され、また出土した円筒埴輪の破片などから6世紀後半から7世紀初頭に鑄造されたものと考えられる。主体部は横穴式石室と考えられるが未調査である。

『館林市の遺跡』(1987年刊)では、山王山古墳を含めた区域は善長寺付近遺跡として登載され古墳周辺の台地上から古墳時代の遺物が散布し、古墳と同時代の集落址の可能性も考えられる。

(本文は昭和59年の調査による記録を参照)



写真10
山王山古墳調査風景



写真11 山王山古墳全景

〈参考文献〉

- 『館林市の遺跡』 館林市教育委員会 1988
『上毛古墳総覧』 群馬県 1938
『群馬県遺跡台帳』 群馬県教育委員会 1973
『板倉町史』 別巻九 板倉町史編さん委員会 1989
『明和村誌』 明和村誌編さん室 1985
『埼玉県史』 通史編1 埼玉県史編さん委員会 1987
『館林市誌』 歴史編 館林市誌編纂委員会 1969
『横穴式古墳の研究』 尾崎喜佐雄 1966
『塚廻り古墳群』 群馬県教育委員会 1980
『奥原古墳群』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
『松本25号古墳発掘調査報告書』 四日町教育委員会 1989

渕ノ上古墳

写 真 図 版



写真12 調査全景（1次調査）



写真13 調査全景



写真14　主体部　南より



写真15　主体部　北より



写真16　主体部直刀出土状態



写真17　主体部玄門　沓石



写真18　主体部側壁石



写真19 土層断面



写真20 土層断面



写真21 5号トレンチ出土状態



写真22 前庭部埴輪列出土状態（円 A）



写真23 前庭部埴輪列出土状態（円 F）



写真24
調査風景



写真25
調査風景



写真26
遺物整理風景

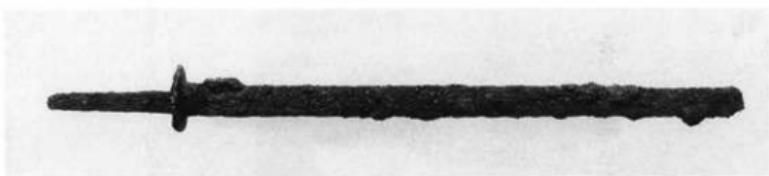


写真27 直刀（K3）



写真28 直刀（K4）

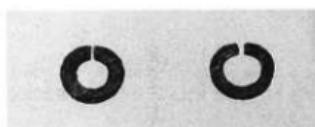


写真29
耳環
(K1・K2)



写真30
環（K21）

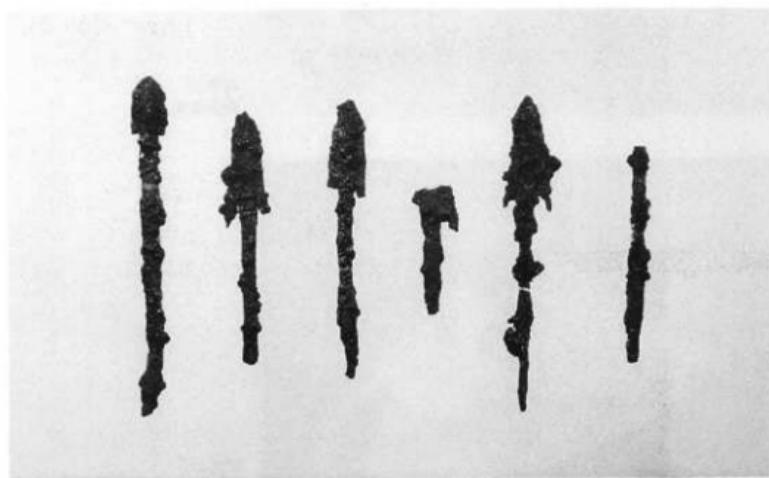


写真31 鐵針（K5～K10）

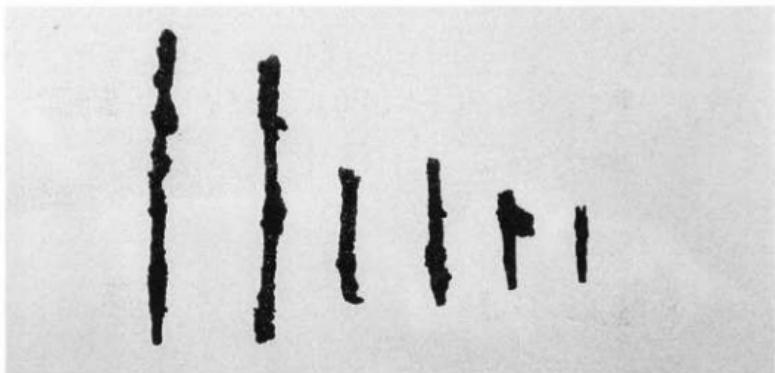


写真32 鉄錠 (K11~K16)

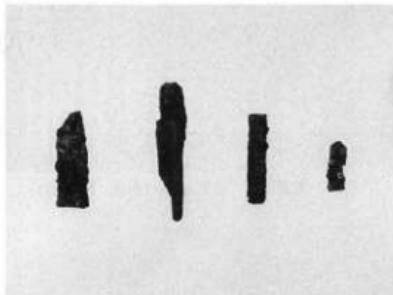


写真33
刀子 (K17~K20)



写真34 鉄斧 (K22)

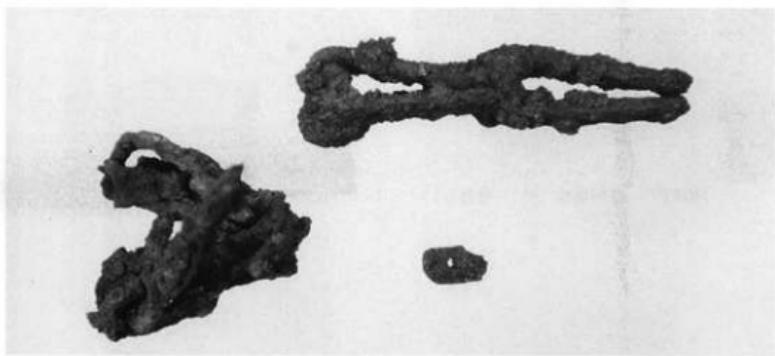


写真35 馬具 (K23~K25)

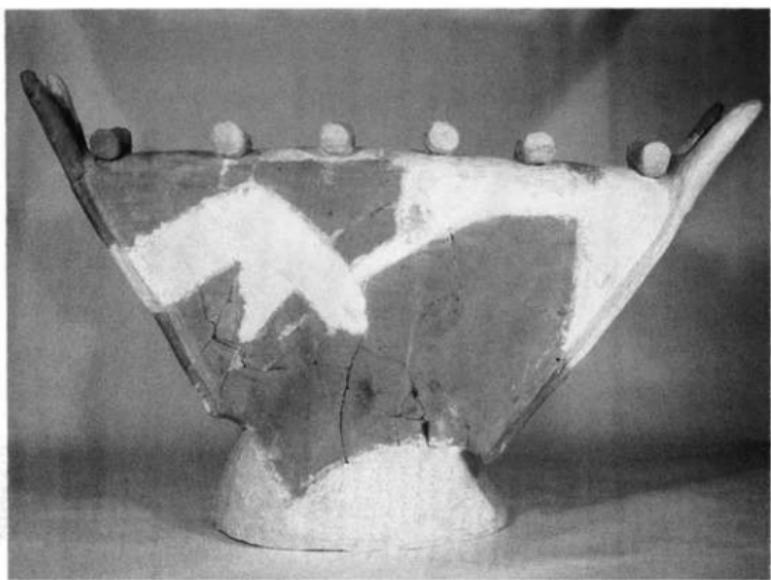


写真36 家形埴輪（形1・屋根部分）



写真37 家形埴輪（形1・壁部分）



写真38 男子像（形5）



写真39 女子像（形2）



写真40 形3（人物）



写真41 形4（人物）

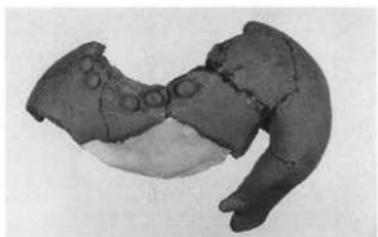


写真42 形6(人物)



写真46 形10(人物)

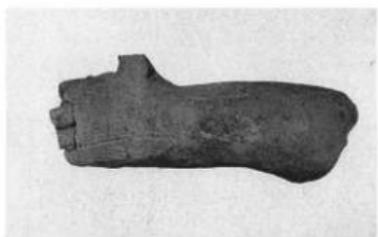


写真43 形7(人物)



写真47 形11(人物)



写真44 形8(人物)



写真48 形12(人物)



写真45 形9(人物)



写真49 形13(馬形)

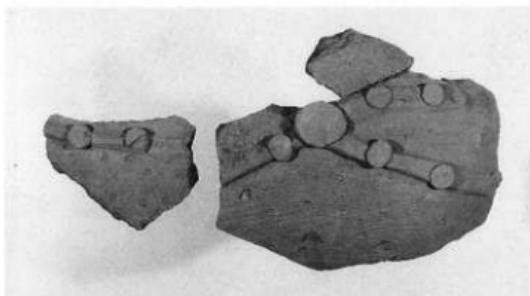


写真53 形17(馬形)

写真50
形14A、14B(馬形)



写真51 形15(馬形)



写真52 形16(馬形)



写真54 形21



写真55 形18



写真56 形19



写真57 形20

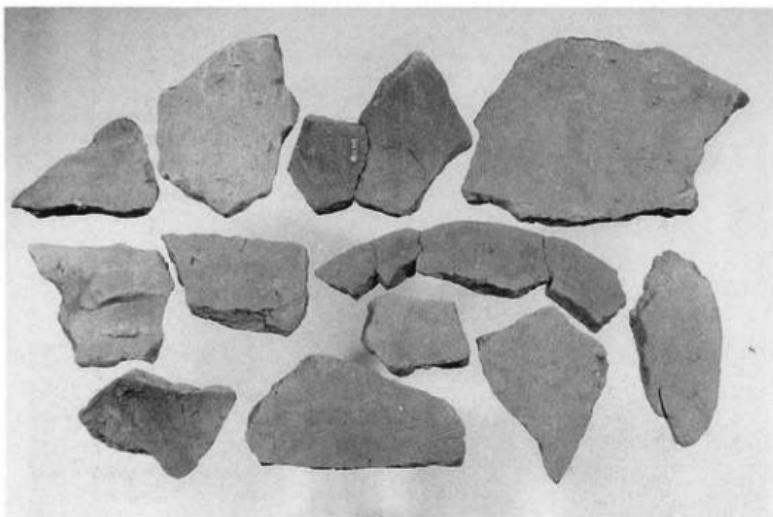


写真58 形22～形33



写真59 円A



写真60 円B



写真61 円C



写真62 円D



写真66 円1



写真63 円E



写真64 円G



写真65 円F



写真67 円2



写真68 円3



写真69 円4



写真70 円5



写真71 円6



写真72 円7



写真75 円10



写真76 円11



写真73
円8



写真74
円9



写真77
円12



写真78 朝1



写真79 朝3



写真80 朝4



写真81 朝2



写真82 朝6



写真83 朝7



写真 84　朝 5



写真 85　朝 8



写真 86　提瓶 (S1)

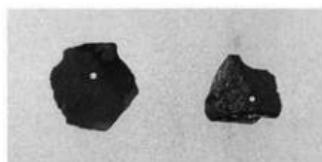


写真 87　石製模造品 (S2 + 3)

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集

渕ノ上古墳 発掘調査報告書

発行 館林市教育委員会文化振興課

〒374 館林市城町3-1

TEL 0276-74-4111

発行日 平成6年3月31日

印刷 田部井印刷有限会社